



Title	中井履軒『昔の旅』翻刻訳注および解説
Author(s)	矢羽野, 隆男; 湯城, 吉信; 井上, 了 他
Citation	懐徳堂センター報. 2005, 2005, p. 83-128
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24366
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中井履軒『昔の旅』翻刻訳注および解説

矢羽野隆男 湯城吉信 井上了 佐野大介
池田光子 黒田秀教 上野洋子 杉山一也

明和八年（辛卯、一七七一）春、中井履軒（一七三一～一八一七）は兄竹山（一七三〇～一八〇四）と共に龍野を訪れた。龍野は亡父鰐庵の故郷で、家督を継いだ伯父をはじめ親族が住む。履軒はこの旅の顛末を、昔の文章博士一行の旅に仮託し、和文による紀行文的な物語『昔の旅』に仕立てた。巻末に「辛卯の年季春」とあり、履軒四〇歳三月の作である。

物語の大筋は次の通り。如月の頃、昔のとある文章博士（竹山がモデル）のもとに播磨国の揖保（龍野）に住むおじ「岡の翁」から手紙が届いた。老いに病の加わった心細さから「会いたい」と書いて寄こしたのである。おじを見舞うため、三月三日の夜、博士は弟の内記（履軒がモデル）や二人の文章生らと共に揖保へ旅立つた。道すがら名勝を愛で人情に触れて和歌漢詩を詠み、揖保では親族と旧交を温め、墓参や遠出などして日を過ぐ。その一方で精力的に当地の孝婦貞婦を訪ねて金品を贈るなどし、二十二日足らずの滞在の後、別れを惜んで帰路につくのであった。

『昔の旅』は『昔の公家の世界』に設定された虚構であるが、そこに述べられた事実に基づく内容は注目に値する。それは竹山・履軒の龍野における活動を髣髴させ、懷德堂の重要な社会活動である孝子貞婦顕彰活動の実態を知る手がかりともなる。

懷德堂文庫には経書史書への注釈や詩文といった漢文による文献だけで

はなく、和文の文献も多い。平成一三年度から一五年度にかけて、科学硏究費補助金による研究「デジタルコンテンツとしての懷德堂研究」（研究代表者 下條真司）の一環として貴重資料調査が行われた。その研究協力者である我々は、和文文献の重要性を感じ、共同で基礎研究を始めた。本稿はその共同研究の成果である。

先ず『昔の旅』の翻刻および訳注を掲げ、後ろに「解説」を付した。「解説」では、研究過程で得られた知見を集約し、『昔の旅』の特徴を説明するとともに、その懷德堂の孝子貞婦顕彰活動における意義を概説した。

『昔の旅』翻刻訳注

凡例

一、大阪大学附属図書館懷德堂文庫蔵の中井履軒手稿本を底本とした。

一、全文を三十二段および『末尾』に分かち、各段に「本文（漢詩には書き下し文を付す）」「現代語訳」「校異」「注」を掲げた。なお、一段中を更に分けるのが望ましい場合は、適宜改行した。

一、懷德堂文庫新田文庫蔵の写本（略称「新田本」）、大阪府立中之島図書館蔵の写本（略称「中之島本」）および『小天地閣叢書』所収の写本（略称「小天地閣本」）の諸本を参照し、底本との異同を「校異」に

示した。その際、先ず諸本の表記をそのまま記し、濁音で読む字は直後に（ ）で示した。

一、底本の誤りと思われるものは、右に「ママ」とした。

一、変体仮名は通行仮名に改め、「ミ」「ハ」「也」「哉」等はそれぞれ「み」「は」「なり」「かな」等に改めた。

一、漢字の旧字体・異体字は、現行の字体に改めた。

一、底本、諸本とも漢字に振り仮名はないが、難読字には適宜振り仮名を付した。

一、漢字の旧字体・異体字は、現行の字体に改めた。

一、濁音には、濁点を付す「小天地閣本」を参考に濁点を施した。

一、底本には読点のみがあるが、適宜句点を施した。

一、本文中の会話や心中思惟等には「」を付した。

一、現代語訳において、文意の補足は「」に、注記は（ ）に括った。

一、執筆担当箇所（文責）は以下の通りである。

《一》～《四》 矢羽野

《五》～《八》 湯城

《九》～《一一》 井上

《一二》～《一五》 佐野

《一六》～《一〇》 池田

《一一》～《一五》 黒田

《一六》～《二九》 上野

《三〇》～《末尾》 杉山

《一》むかし文章の博士ありけり。そがおぢに岡の翁と聞ゆる、はりまの国いばのわたりに、年へてすみける。きさらぎのころ、「老木の桜くちまさり、いやましに見まくほし」と、せうそこしける。さらでだに、年ごろおぼつかなく、いひおもひたまひしを、まいてやまうにさへふしづみ給ふけると聞て、「おほやけのしげきわざは、さることなれど、ことしのみかは」とて、すこしたゆめるおりすぐさず、廿日ばかりのおこたり、まうしたまはりて、三月三かの夜なん、難波より舟出しける。

【現代語訳】昔、文章博士がいた。その伯父に岡の翁という方があり、播磨の国の揖保川辺りに長年住んでいた。如月の頃、「その伯父から」桜の老木が更に枯れ衰え、ますます会いたい」と便りがあった。そうでなくとも、数年来「伯父のことが」気がかりだと言つたり思つたりしておられたのに、さらに加えて病の床にまで伏してしまわれたと聞いて、「多忙な公務は言うまでも無いことだが、それは今年だけのことであろうか「今年だけではない」と考えて、少し仕事にゆとりのある時期を逃さず、二十日ほどの休暇を願い受け、三月三日の夜に難波の港から船出した。

【注】○文章の博士 律令制下の式部省に属した官吏養成機関である大学寮で、文章道を教授した教官。文章道は、明經道から分離したもので、漢詩文や史書を対象として学ぶ。神亀五年（七二八）に定員一

人を置き、平安後期以降は、菅原・大江・藤原の三氏が世襲した。○

岡の翁 中井竹山・履軒兄弟の伯父中井伯元（一六八八～一七七五）

をさす。竹山・履軒の父中井斎庵（一六九三～一七五八）には兄三人と弟一人があつた。伯元は斎庵の次兄で、幼くして叔父玄意の養嗣子となり、三五歳で龍野藩の藩医の家督を継ぎ、八歳で隠居するまで五代の藩主に仕えた。和歌を嗜み、加藤竹里などとも交流のある紳人で「鳳岡先生」と称され、隠居後は「睡翁」と称し、八八歳の長寿を得た。○はりまの国いばのわたり 播磨国（いのま）の西南部を流れる揖保川流域。一行の目指した龍野は揖保川西岸の揖西郡に属し、脇坂氏五万一千石の城下町であった。○老木の桜 年月を経て老いた桜。ここでは、年老いた岡の翁を指す。第三段にも、翁の詠んだ歌に「老木の桜またも」と見える。

やうはおもりかにて、かうやうの旅なん、いとかたし。

【現代語訳】 川舟に乗り、尼崎から上陸した。博士の弟で内記の官にある人と、文章生二人とを従者に仕立てて行った。「文章生のうち」一人は野氏である。もう一人は源氏であった。「彼ら二人は」道中での詩文の相手として供に加えられたのである。その他には、召使が一人二人、粗末な荷物を担いで馬の後ろについてお仕え申し上げた。朝廷の使者として旅するような場合には、荷物は美々しく、お供の数も多く、騒がしくなるものだけれども、「今回は」はじめから私的な特に内々に行く旅とはいえ、昔は何事につけてもこのように軽快で、見た目がござつぱりしていた。だから、もの悲しいことも楽しいことも、「今に比べて」多かつたのである。当世風は重々しくて、このような旅をするのはとても難しいことだ。

【二】川舟にて、あまが崎よりはあがりぬ。はかせの弟に、内記なりける人と、文章生ふたり、侍にしたてゝいきけり。一人は野氏なり。またひとりは源氏なりけり。道すがらの、文うたのかたきのれうなるべし。そが外には、下部ひとりふたり、あやしの物かつぎて、馬のしりにつかうまつれり。おほやけのおん使に出たつなどは、ものきらゝかに、人おほくて、かしがましかるべきを、もとよりわたくしのことにしのびたるものから、むかしはなにごとも、かくかららかに、めやすかりし。さればわびしさも、おかしさも、数まさりぬべき。今

【注】○あまが崎 現在、兵庫県尼崎市。摂津国川辺郡に属し、松平氏四万石の城下町。山陽道を下る場合、大坂から三里離れた第一番目の宿場。○内記 律令制下の中務省に属し、詔勅や宣命を起草し、宮中の事々を記録する官。大・中・小各々二人あり、能文・能筆の者が選任された。○文章生 大学寮で文章道を学ぶ学生。○野氏 文章生

出身の小野篁（八〇一～八五二）ら詩文に長じた小野氏をイメージしたものである。『野氏』は小野氏の漢人風の表記。○源氏 文章生出身の源順（九一一～九八三）ら詩文に長じた源氏をイメージしたものであろう。

《三》まことや、その前の夜なん、したしきかぎり、おくりきて、川のほとりにをりゐて、酒すゝめ、から歌つくれり。

山陽駅路動征鑣

山陽の駅路に征鑣を動かし、

分手華川綰柳朝

手を分かつ華川に柳を綰ぬる朝。

暁日錦袍侵露湿

暁日に錦袍は露に侵されて湿い、

晚風驄馬蹴花驕

晚風に驄馬は花を蹴つて驕なり。

舞浜万樹潮頭接

舞浜の万樹潮頭に接し、

淡島千帆望際遙

淡島の千帆望際に遙かなり。

到處春光泉石富

到る處春光泉石に富み、

好教囊裡滿瓊瑤

囊裡に瓊瑤を満たしむるに好し。

与隣*

並轡群仙幾日帰

轡を並ぶる群仙幾日か帰る、

揚鞭雲際紫驃飛

鞭を雲際に揚げ紫驃飛ぶ。

龍山遊屐花応好

龍山に屐を遊ばすれば花は応に好か

るべく、

鶴水垂綸魚亦肥

鶴水に綸を垂るれば魚も亦肥えむ。

離席窮歎交巨爵
詩朋惜別引征衣
前程豈道千余里
獨恨風光兩地違
離席歎を窮めて巨爵を交わし、
詩朋別れを惜しんで征衣を引く。
前程豈千余里と道わんや、
独だ恨む風光兩地違うを。

恥叔*

手を分かつ春江の上、

長程興不窮
長程興窮まらず。

輕舟垂柳浪

去馬落花風

山碧清煙外

海明斜日中

壯遊元所願

未得与君同

山は碧なり清煙の外、

去馬落花の風。

海は明らかなり斜日の中、

壯遊は元より願う所なるも、

未だ君と同じうするを得ず。

彪外*

莫怪滿山雲

夜來暗風雨

怪しむ莫れ満山の雲、

夜來風雨暗きを。

双起平輿龍

双び起つ平輿の龍、

西飛帶繡虎

西に飛んで繡虎を帶ぶれば。

子淵*

おほかれど、さのみやはとて、もらしつ。

【現代語訳】ところで、その前の夜に、親しい者がみな見送りに来て、

岸辺に座って、酒を勧めて、漢詩を作った。

山陽道に旅の馬を進め、華川で友に別れて柳の枝を曲げる朝。

朝日を浴びて錦の長衣は露に濡れて潤い、夕方の風に吹かれて馬

は花を蹴って元気よからう。

舞子の浜の木々（青松）は海に連なり、淡路島を背景に浮かぶ多

くの帆は遙か遠くに望まれる。

到るところ春光にあふれ山水のよい景色にはこと足りる。道中作

つた詩で袋をいっぱいにできるだろう。

与隣

馬を並べて旅立つ一群れの仙人たちはいつ帰つて来るのだろう

か。雲のかかるこの地に鞭を揚げると駿馬は天翔ける。

龍野の山々を巡ればきっと桜は見頃だらうし、加古川に釣り糸を

垂れれば魚も肥えて美味かるう。

別離の宴では存分に楽しんで大盃に酒を酌み交わし、見送る友は別れを惜しんで旅の衣を引き留める。道のりは千余里とはいえないが、ただ残念なのは向こうとこちらとでは景色の余りに違うこと。

恥叔

春の川辺で別れてからは、長い道中楽しみは尽きまい。

軽快な舟は柳が枝垂れる波の上を滑り行き、行く馬は桜が散る風の中を進むのだろう。また、山は清らかな霞の向こうに青々のぞき、海は夕日を映して明るく澄み渡つていいよう。こんな楽しい旅をしたいとずっと前から願つていたが、君たちと

一緒に行けないのが残念だ。

恥外

怪しむには足りないよ、山全体に雲がかかり、昨夜から雨風で真つ暗だつたのも。

「平輿の龍」〔ともいうべき博士・内記の兄弟〕が二人並んで旅立ち、「繡虎」〔といふべき文才ある学生〕を連れて西に向けて飛び行くのだから。

子淵

〔餓別の詩は〕沢山あつたのだが、そばかき書き連ねていられようか、ということで省略した。

【校異】*川 新田本「河」。*与隣 新田本なし。*恥叔 新田本なし。*彪外 新田本なし。*子淵 新田本なし。

【注】○その前の夜 三日の夜。三日の夜に川辺で送別の宴が催され、そこで詩の応酬があつた。その後、名残り尽きぬ者五六人が川舟に乗り、四日明け方に尼崎に上陸、そこでも酒宴を設けたと、第五段に見える。

〈山陽駅路・詩〉詩型は七言律詩、韻字（平水韻による）は鑣・朝・驕・遙・瑤。（下平声蕭韻〔廣韻・蕭・宵韻〕）。○駅路 宿駅のある街道。○征鑣 旅に出る馬。○分手 手を分かつ、別れる。○華川 浪花の川か。（桜の）花咲く川ともそれそつだが、その意味での用例は唐詩には無い。○絹柳 旅のはなむけに柳の枝を折つて環状に結んで旅人に送る習慣が中国にあった。「絹」は、わがぬ（環に結ぶ）。○驕

馬 「驥」は、青黒と白色と毛の混じった馬。○舞浜 舞子の浜の漢語表現。現在の神戸市垂水区にある白砂青松の風光明媚な浜。東は須磨、西は明石、明石海峡を隔てて淡路島に対する。○淡島 淡路島の漢語表現。○泉石 山石と流水、転じて山水の景色。○瓊瑤 美しい

玉 転じて詩文の美的表現。○与隣 明和八年から九年に行われた『大日本史』筆写の協力者に「原与隣」が見え、同一人物と思われる。加地伸行編著『中井竹山・中井履軒』(明徳出版社)『叢書日本の思想家二四』、昭和五五年)卷末「関係人物表」参照。

並轡群仙・詩 詩型は七言律詩、韻字(平水韻による)は帰・飛・肥・衣・違(上平声微韻)。○並轡 「轡」は手綱で、手綱を並べ連れ立つて行くこと。○群仙 群れをなす仙人。博士・内記・学生ら一行を仙人に喩えたもの。○揚鞭 鞭を揚げて勢いよく馬を駆り立てる。

○雲際 雲のかかる所。「群仙」と合わせて、俗塵を離れた一行の旅立ちを表現するのである。○紫駒 「駒」は黒栗毛の駿馬。○龍山 龍野の山々の漢語表現。○遊屐 「屐」は履物で、山野を歩き巡ること。○鶴水 鶴と加古との音の類似による加古川の漢語表現か。加古川は兵庫県中央部を流れて瀬戸内海に注ぐ、山陽道有数の河川。○垂綸 「綸」は釣り糸で、釣り糸を垂れること。○離席 送別の宴席。

○窮歛 酒を酌み交わす喜びを存分に味わう。○巨爵 「爵」は盃で、大きな盃の意。○征衣 旅の衣。○千余里 大坂と龍野間は直線距離で百キロメートルに満たない。千余里は当然実数ではなく、相離れた心理的な遠さを言う。送別詩での使用例に、王維「送権二」の「恨むらくは別ること千余里、堂に臨み素琴を鳴らす」、同「送熊九赴任安陽」の「相去ること千余里、西園に明月同じ」などがある。○風光両地違 「風光」は景色、眺め。「両地」とは、博士ら一行の遊ぶ龍

野への道中と友人たちが残された大坂を指す。さほど隔たらぬ播磨と大坂ながら、両地の景色が余りに違つて、大坂ですばらしい眺めが味わえないのが残念というのである。○恥叔 竹山・履軒の知人の字であろうが、未詳。

〈分手・詩〉詩型は五言律詩、韻字(平水韻による)は窮・風・中・同(上平声東韻)。○壯遊 意気盛んな遊覧。○彪外 竹山の弟子の辻本氏、名は彌中(ひうちゅう)、字は彪外。『眞陰集(文集)』卷六「辻本生名字説」に見える。辻本氏に名・字を請われた竹山は、日頃好む『法言』君子篇の言葉「中に彌ちて外に彪わる(彌中而彪外)」からとつて与えた。字を与えたのは辻本氏の元服時、明和六年(一七六九)のこと。

〈莫怪・詩〉詩型は五言古詩、韻字(平水韻による)は雲・虎(上声麁韻)。○莫怪 怪しむ莫れ、不思議に思うな。龍虎が活動すると風雲が起ることという同類感応の考えは、例えは「雲は龍に従い、風は虎に従う」(『易』乾卦文言伝)、「虎嘯いて谷風至り、龍拳がりて景雲属く」(『淮南子』天文訓)などに見える。龍(博士・内記に比す)や虎(文章生に比す)の出発に風雨が起ることは当然だというのである。

○平輿龍 平輿は地名(現在の河南省汝南郡)。後漢末の謝甄(しゃせん)が平輿の許虔・許邵の兄弟を見て「平輿の淵には二匹の龍がいる」と称えた故事による(『世説新語』賞讃篇)。ここでは博士・内記の兄弟を指す。

○帶繡虎 「繡虎」は刺繡の虎。詩文の才に優れることを言う。ここでは詩文の相手にと連れた一人の文章生を指す。『世説新語補』賞讃篇上に「曹子建七步に章を成し、世目して繡虎と為す」と見え、曹植の文才を世間で「繡虎」と評した故事による。なお、履軒には『世説新語補』の注釈書『世説新語補題』がある。○子淵 懷德堂三代目学主であった三宅春樓の嗣子、名は光同、字は子淵、号は西海。履

軒の京都行の送別会での詩を集めた『懷德堂会餞詩卷』（明和三年、一七六六）に参会者として三宅子淵が見える。同一人物であろう。加

地伸行編著『中井竹山・中井履軒』（明徳出版社）叢書日本の思想家二四、昭和五五年）巻末「関係人物表」、湯城吉信『『懷德堂会餞詩卷』訳注』（中国研究集刊）陽号（大阪大学中国学会編、一〇〇三年））参照。

《四》旅の君たちは、留別とて、

野生

抛却河梁離別情 河梁離別の情を抛却すれば、
無窮清興万山青 無窮の清興 万山青し。
狂夫自笑煙霞癖。 狂夫は自笑す 煙霞の癖、
吟鞍不遠幾長亭 吟鞍遠しとせず 幾長亭。

源生

離堂一任夜冥々 離堂一に夜の冥々たるに任せ、
絳燭清尊聚德星 絳燭 清尊に徳星聚まる。
領略溪山行樂好 溪山に行樂するの好しきを領略する
も、
未知双眼向誰青 未だ知らず 双眼 誰に向けて青くせん
かを。

博士

春酒ト良会

春酒もて良会をトし、
吾の西播に行くを送る。

送吾西播行

衣は海氣を衝いて潤い、
馬蹴潤花軽

衣衝海氣潤

馬は潤花を蹴つて軽し。

馬蹴潤花軽

到る處皆親旧、
到る處皆親旧、

到處皆親旧

相隨うは是れ弟兄、
相隨うは是れ弟兄、

相隨是弟兄

相隨うは是れ弟兄、
相隨うは是れ弟兄、

無端賦采葛

端無くも 采葛を賦せば、
忽覺別魂驚

忽として覚る 別魂の驚くを。

内記はゑひふして、つくらずありけるが、ふしながら、は
るかに西のかたをながめやりて、

三か月に いざ引つれて あづさ弓
ゐる山のはに あすはねるらん*

【現代語訳】旅に出る方々は見送る友に書き残す詩として、

野生

〔蘇武が李陵とが橋のたもとで別れを告げた、そんな〕離別の辛
さを打ち捨てて「旅路につけば」、旅の感興は尽きることなく、
どの山々も青く連なる。

旅行狂いのこの俺だが、山水を楽しむ癖には我ながらあきれてしまふ。鞍上に詩を吟じて行けば、幾十里もの街道もちつとも遠く

は思われぬ。

源生

餞別の宴は夜の深々と更けるに任せ、赤々と燃える灯火と澄んだ酒を満たした樽とに賢者らが寄り集う。道中の谷や山は楽しむのに絶好の場所とは心得ているが、私の二つの目玉、いつたい誰にむけて青眼を見せたものやら。

博士

良き日を選び集まつて春の新酒を酌み交わし、我らが西の方播磨へ行くのを見送つてくれる。旅衣は海の気に当つてしまつて、馬は谷川の花を蹴つて軽快に進み行く。

到るところで出会いのはみな親類や古馴染み、連れ立つてゆくのは兄弟。

「何の憂いもなかつたが」はからずも「采葛」の如き別離の詩を詠もうとするや、突然友と別れる悲しみが心を動かした。

内記は酔い臥して漢詩を作らずにいたが、寝転びながら、はるか遠くの西方を眺めて、「次のように歌を詠んだ。」

三日月に、さあ引き連れられて、「引く梓弓を射るではないが」三日月の入る「西方の」山の端に、明日は寝ることだろうなあ。

【校異】* 辟 新田本「僻」。* ねるらん 新田本「ねぬらん」。

【注】○留別 旅立つ人が見送る友人に詩文を書き残すこと。

（抛却河梁…詩）詩型は七言絶句、韻字（平水韻）は情・青・亭（庚）

・青韻）。厳密には情と青・亭とは韻目が異なり、この点を重く見れ

ば古詩となる。○抛却 打ち捨てる。○河梁 川に架けた橋。前漢の

時代、ともに匈奴に捕らわれの身であった李陵と蘇武であったが、蘇武は漢への帰還を許された。李陵は別れに臨んで「手を携て河梁に上

り、游子暮に何くにかぞく」という詩を送り、これに因んで「河梁」

は送別の地をも意味する。○清興 俗を離れた風雅な楽しみ。○狂夫

自分の思うまま勝手気ままに生きる人。杜甫の詩「狂夫」に、貧しい暮らしを自嘲して「自ら笑う狂夫 老いて更に狂」と見える。杜甫

は自分の人並みでない性癖・生き方を「狂」と称した。ここでは、そのような深刻な意味ではなく、山水を楽しむ性癖を持つ者の自称。○

煙霞 山水に立ち込める雲や霞、また山水の景色。○長亭 十里」と設置された宿駅。

（離堂一任：詩）詩型は七言絶句、韻字（平水韻による）は、冥・星

・青（下平声青韻）。○離堂 送別の宴席。○一任 「一」は専ら、すつかりの意で、すつかり任せること。○冥々 暗いさま。○絳燭

「絳」は赤い色で、赤々と燃える灯火。○清尊 「尊」は酒を容れる樽。○聚德星 「德星」は吉祥とされる星。後漢の陳寔が子や甥を連れて荀淑のところへ出向いた際、天に德星が聚つたので、それを観測した太史が「五百里内に賢人の聚ること有り」と報告した（『世説新語』徳行篇の劉孝標注所収『続晉陽秋』）。このことから、賢人が聚まり集うことを意味する。○領略 会得する、味わう。訳では領略する対象を一句全体に掛けたが、「溪山」のみに掛け「溪山を領略して行楽好し（溪山を味わえて結構な行楽だ）」とも解釈できる。○双

眼向誰青 青眼は、気持ちの通じ合う者に対して見せる目つき。阮籍

は礼教に拘泥する俗人には白眼を向け、心の通じる脱俗の人物には青眼を見せたということから『晋書』阮籍伝)。ここでは、大坂の友人たちと別れた後は、いつたい己の両つの青眼を誰に見せねばよいのか、君たちほど心の通じる人々は期待できぬ、という意味。

〔春酒・詩〕詩型は五言律詩、韻字(平水韻による)は行・輕・兄・驚(下平声庚韻)。○無端はしなくも、はからずも。○采葛『詩經』王風「采葛」。その一節に「彼采葛兮、一日不見、如三月兮」とあるように離別の辛さを詠む詩。ここでは友人との別れを惜しんで作る別離の詩を、「采葛」になぞらえているのである。○別魂離別に際しての悲しい気持ち。

〔三か月に・歌〕○三か月 陰暦で毎月の第三夜過ぎに月が出る、細い草刈り鎌の形をした月。○あづさ弓 梓の木でできた弓で、「射る」「引く」「張る」などの語にかかる枕詞。ここでは「(弓を)射る」にかけて直後の「る」を導く。すぐ下の「る」は「入る」の意であるから、正しくは「いる」とすべきものであろう。また「あづさ弓」とすぐ上の「引く」とは縁語である。

〔五〕舟いづる、なをあかずとて、五六人ばかり、したひきてのりぬ。いとせばきふねに、おしこりて、身じろぎもせで、あけがたに、尼が崎にあがりぬ。また酒のみなどして、出たふんとするに、よべないきのつくりずなりぬるを、ほいなきこと、人々にせめられて、石筆といふものをとり出で、まきのおくにかいづく。

【現代語訳】舟が出る頃、まだ名残惜しいといって、五六人ほどが後を追つて来て舟に乗つた。とても狭い舟に無理に乗り込んで身動きもせず、明け方に尼崎に上陸した。そこでもまた酒盛りなどして旅立とうとすると、昨夜は内記が漢詩を作らずじまいであったのを、それではだめだと、人々に責められて、「仕方なく内記は」石筆というものを取り出して、「昨夜来、応酬された漢詩を記した」冊子の末尾に書き付けた。

江水三十里

江水三十里

感歎相送意

感歎す相い送る意に。

離酒復互斟

離酒復た互いに斟み

征馬再三嘶

征馬再三嘶く。

去々浹辰別

去々浹辰の別れ、

何事勞愁思

何事か愁思を勞す。

従是春物好

従是春物好く、

名勝到處開

名勝到る處開く。

連山肩上聳

連山肩上に聳え、

蒼海掌中視

蒼海掌中に視ゆ。

奚囊待我發

奚囊我が發くを待ち、

神遊使君娛

神遊君をして娛しましむ。

唯恐奇絶境

唯だ恐る奇絶の境を、

塵筆不得写

塵筆写すを得ざるを。

三十里の旅出に臨み、送別的心に感激する。

互いに別れの酒を酌み交わすと、馬はしきりに嘶く。

去れ、十二日ほどの別れに愁いなど必要ない。

これから春は酣で、至る所名勝だ。

連山は肩のすぐ上に聳え、青い海は目と鼻の先に見える。

詩を入れる袋は私に開かれるのを待っている、すばらしい遊びが

君を楽しませる。

ただ心配なのは、世俗にまみれた私の筆で、絶境を描写すること
ができないことだけだ。

【校異】*ないき 新田本「内記」。*出て 新田本「いて(で)て」。

西の宮といふ処をすぎて、青海原を見わたして、博士馬の上
にて、

征驥出尽西宮駅 征驥出尽す 西宮の駅、

海色蒼茫樹上開 海色蒼茫として樹上に開く。

と口^{*}づさみて、野生をかへりみて、「」の上をつけよ」との
たまへば、とりあへず、

〔江水三十里…詩〕○江水三十里 「江水」は長江のこと。明の袁凱

の詩に「江水三千里」という句がある。履軒は龍野行の行程に合わせ
「三十里」としている。○浹辰 十二支一巡り、即ち十二日間。○奚

詩文を入れる袋。

「ないきはいかにみたるぞ」とあれば、

風はやみ 青海原に ちる帆影

小田にとびかふ 鶯かとぞみる

《六》たちわかれゆくほど、ひなのすまゐの、めなれずめづ
らかなるに、山や河やとながめわたり、散のこる桜の處々に

みゆるも、わざとならずおかし。かぶと山のみゆるほど、は
かせ源生をよびて、さしあしへつゝ、「あの山なん、そこの
遠つおやの、君のおんために、屍をさらしたる処ぞ。しらず
やある」とのたまひければ、としわかくて、さだかには聞も
さだめざりしを、かくと聞いて、うち涙ぐみて、

松たかみ 嶺のあらしの 音にのみ

むかしのあとゝ 聞ぞ悲しき

【現代語訳】別れて行くうちに、鄙びた住まいが、見慣れず珍しげで、山や河やと眺め通し、散り残った桜が所々に見えるのも、わざとらしくなく趣がある。六甲山が見える頃、博士は源生を呼んで、指さし教えながら、「あの山こそが、お前の祖先が、主君のために屍をさらした所だ。知らないか」とおっしゃると、年が若くて、はつきりとは聞いたことはなかつたが、こうだと聞いて、涙ぐんで、「次のように歌に詠んだ。」

松が高いので、峰に風の音が聞こえる。その音ではないが評判にだけ、昔の跡と聞くのが悲しい。

西宮という所を過ぎて、青海原を見渡して、博士は馬の上で、

馬は西宮の宿場を離れ、海は青々として木々の間に広がつていて。と「漢詩の後半を」口ずさんで、野生を振り返つて、「この上をつけよ」とおっしゃつたので、とりあえず、「野生は次のようにつけた。」

花は暗く、河原にこぬか雨が降り、町で汚れた満面の塵を洗つてくれる。

「内記はどう見るか」とあつたので、「内記は次のように和歌に詠んだ。」

風が速いので、青海原に散らばる帆影が、田んぼに飛び交う鶯かと見える。

【校異】*散の「る」 新田本「ちりの「る」。*処々 新田本「所々」。

*遠つおや 新田本「遠つ親」。*とし 新田本「年」。*聞ぞ 新田本「きくそ（ぞ）」。*博士 新田本「はかせ」。*口 新田本「くち」。
*みたる 新田本「見たる」。

【注】○かぶと山 六甲山の東端に六甲山^{かぶとやま}という山があるが、ここでは六甲山を指すと思われる。六甲山の名前の由来として、継母の神功皇后に謀反を企てた麿坂王^{かづさかみ}とその家来五人が首を刎ねられその六つの兜首（兜を被つたままの首）を埋めたから六甲山というようになったという話がある。この由來說は、懷德堂出身者である中井藍江が絵を描いた『播州名所巡覽絵図』（享和三年（一八〇三））にも見え、江戸時代に広まつていて説だと思われる（他、『摂陽群談』元禄十四年（一七〇一）、「摂津志」享保二十年（一七三五）、「大阪繁昌記」明治十年、卷11）。「昔の旅」で源生は葬られた家来の子孫だということになつてゐるのであろう。ただし、神功皇后の話（記紀にあり）は四世紀頃のものであり、一方、六甲山の名が文献に登場するのは貝原益軒の「有馬温泉記」（寛永八年（一六三一））など江戸時代からだと言われる。六甲山は、奈良平安時代には「牟古山」「六児山」などと表記され、「むこやま」と呼ばれたと思われる（現在の「武庫」に当たる）。「むい」の意味は諸説あるが、大阪方面から「向」うに見える」というのが有力である。後に、この「むい」に漢字の「六甲」が当たられ、「ろつこう」と音読みされ、先の伝説が当たられたと考えるべきであろう。ちなみに、地名の訓読みが音読みに変わるのは、「ぶたら」に「日光」が当たられ「にっこう」と呼ばれるようになったようになつた例が多い。

〈征騒出尽…詩〉○征騒 「騒」はそえ馬。

『七』「布引の滝は、都遠からぬを、いまだ見ざることよ、いざ」といふほど、空かきくもり、雨ふり出たり。^{*}馬も通はぬ山路をわけなんこと、いとかたしや。さはれ、「思ひたちたることを、やみなんや」とて、はかせを始めとして、簾すがたにて、山の細道をたどりゆくに、雨もいたくはふらずなりぬ。滝ちかくなるまゝに、山のはらに、家ゐきらゝかにみゆ。しろきついひぢ、瓦ぶきのくら、水碓^{みのうす}の屋など、思ひかけぬさまは、かの桃の源にやとおどろく。からうじていきつきたり。げにふかくわけたる、山のかひありて、聞しにすぎて、見處おほかり。

はかせ

布引^{*}のたきのしら玉 ながめこし

よゝのことばの数にとらまし

ないき

雲井より 落くる滝の しら玉は

天の河原の さざれ石かも

野生

山姫^{*}の そらにさらすと 音に聞いて

いまこそきつれ 布びきの滝

花あるころなれば、ゆきかふ人々、さしもなき宮寺、あるは

里人のつくり出たる、何くれと名所めくあたり、廻せくつどひたりや。この滝は、まことに見どころありて、歌にもふるくより読たるを、「この人々の外には、また誰かはきたる、あさまし」とおぼひて、内記、

花にはふ 日影にさらす 布引の

滝^{*}心をわれこそはくめ

【現代語訳】「布引の滝は、都から遠くないのに、まだ見ていないことだ。さあ「行こう」と言つた時、空はかき曇り、雨が降り出した。馬も通れない山路を分け入ることは非常に難しい。そうではあるが、『思い立つたことを止められようか』と、博士をはじめとして、簾姿で山の細道をたどりゆくと、雨もひどくは降らなくなつた。滝が近くなるにしたがつて、山腹に、家の様子が立派に見えた。白い築地、瓦葺きの蔵、水車小屋など、思いがけない様子は、あの桃源郷ではないかと驚く。からうじてたどり着いた。誠に深く分かれた山の峡谷があり、聞きしにまさり見所が多かつた。【それぞれ次のように歌に詠んだ。】

博士

布引の滝の水しぶきを、これまで詠われてきた代々の言葉の数だけ取ろう。

内記

雲の彼方から落ちてくる白玉は、天の河原のさざれ石かもしれな

い。

野生

山の神が空に曝したと尊に聞いていたが、今こそやって来た、その布引の滝に。

花の咲いている季節なので、行き交う人々は、大したことのない社寺、あるいは里人の作り出した、何やかやと名所っぽい辺りに、所狭しと集まっている。この滝は本当に見所があり、和歌にも古くから読まれているが、「この人々の外には、また誰が来ただろうか、嘆かわしいことだ」と思えて、内記は「次のように歌に詠んだ。」

花が咲き、日光にさらされている布引の滝の、高ぶる心を私こそが汲み取ろう。

【校異】*出たり 新田本「いで（で）たり」。*さばれ 小天地閣本「さばれ」。*思ひ 新田本「おもひ」。*細道 新田本「ほそ道」。
*思ひ 新田本「おもひ」。*布引 新田本「布ひ（び）き」。*よゝ
新田本「世々」。*落ぐる 新田本「おちくる」。*山姫 新田本「山
ひめ」。*ゆきかふ 中之島本「ゆきかふ」。*見どいろ 新田本「み
と（と）こる」。*読たる 新田本「よみたる」。*おぼひて 小天地
閣本は見せ消ちにし、朱筆で「おぼえて」に改める。*滝つ 新田本
「たききつ」。

【注】○布引の滝 六甲山にある滝。古来、歌枕として有名で、「天
の川これや流れの末ならむ空より落つる布引の滝」（『金葉和歌集』雜
上、読み人知らず）や「ひさかたの天つて女が夏衣雲ゐにさらす布引

の滝」（『新古今和歌集』雜中、藤原有家）などの歌が残されている。

『伊勢物語』八十七段にも見える。○水碓 「みづうす」。水車を動

力として穀物をひくことなどに用いた臼。

（布引の…歌）○よゝのいとば 布引の滝を詠った歌が多いことを言

うのである。上記、「布引の滝」注参照。
（山姫の…歌）○山姫のそらにさらず 『古今和歌集』に「裁ち縫は
ぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらん」（雜上、伊勢）と
いう歌がある。

（花にほよ…歌）○滝つ心 「滝つ」は「たぎる」の意。ちなみに、
『万葉集』に「嘆きせば人知りぬべみ山川の激つ心を塞かへてあるか
も」（譬喻）という歌がある。なお、「滝」と「たぎつ」は語源を同じ
くする。○ぐめ 「汲め」。滝の縁語。

《八》湊川に、楠中将のつか*

ほそ道に ぬれそぼちつゝ たづねこし
昔しのぶの 草の露けさ

内記は「」とに涙おとして、

日にかざす 南の枝のかれしより

世はといやみと なりまさりつゝ

野生もかくなん*

落かゝる* 日をかへしけむ 玉ぼこの
道ふみならしとふ人のなき

博士は文つくり、墓祭*し給ふけれど、わづらはしければかゝ

ず。こよひは福原にとまる。かの平相国が、民のわづらひを
もかへりみず、きづき出したるあたりなり。こゝにあひしれ
る人あり、とひきて物がたりす。

【現代語訳】湊川に、楠正成の墓があつた。源生は、「次のように歌
に詠んだ。」

細道を濡れながら訪ねて来ると、昔をしのぶといふ草が露
に濡れている。

内記は特に涙を流して、「次のように歌に詠んだ。」

日光にかざす南の枝が枯れてから、世の中はますます真つ暗闇に
なつてしまつた。

野生もこのように、「歌に詠んだ。」

【清盛が】落日を招き戻したという道を、今は踏みしめて訪れる
人もない。

博士は漢文を作り、墓参されたが、煩わしいので書かない。この夜は
福原に泊まつた。あの平清盛が人民の労苦をも顧みずに「都を」築い
た辺りである。ここに知り合いがおり、訪ねてきて雑談した。

『九』五日には、つとめて出て、名にしおふ須磨の浦をなが
めわたるに、空くもりて、島の面影おぼつかなきほどなれど、
海の面のうらへと青みわたりたるは、常よりもまさりてみ
ゆ。誰にか、

淡路島 あはと見わたす みるめさく

【校異】*つか 新田本「塚」。*かぐなん 新田本「かぐなん」。*

落かゝる 新田本「おちかゝる」。*かへしけむ 新田本「かへしけ
ん」。*祭 新田本「まつり」。*あひ 新田本「相」。*あり 新田
本「ありける」。

【注】○湊川 楠正成が足利尊氏との戦いに敗れ自害した場所。

（ほそ道に：歌）○露けさ 露は涙を暗示する。『新古今和歌集』に
「たちばなの花ちる軒のしのぶ草昔をかけて露ぞこぼる」（夏、前

大納言忠良）という歌がある。

（ほそ道に：歌）○南の枝 楠正成を喻える。『太平記』卷三に、後
醍醐天皇が、笠置の行在所で、南の枝が伸びた木の夢を見て、楠を暗
示するものだと知り、楠正成を求めるという話がある。

（落かかる…歌）○日をかへしけむ 平清盛が、大輪田泊の改修工事
を進捗させるべく、沈みかけていた太陽を招き返したという俗説を踏
まえる。○福原 平清盛が新都を建設した所。

○平相国 平清盛のこと。

霞こめたる 春の海つら

かのあひしれるが子、酒くだものなど、さゝげさせてこゝまでぞ送りきにける。浜辺におりゐて、さけのみ、かれゐくひなどす。月あるころならば、こゝにくらして、夜とともにながめたまふらんを、くちおしきや。

今やうの「須磨組」といふものに「さらしなの月ともに、ながめあかさん」とうたふは、いかにぞや。このすまの浦ぞ、まことにならあかたなきを、まほならず、かくいひけちたる、いとくちおしきや。さらばいかでよからん。内記に「引なをせ」といひければ、「すまといふも浦の名、あかしといふも浦の名、月もまろやのすまゐに、あかしかねたるうら人、かくもや」とてうたひければ、みな人けうじあへり。

【現代語訳】五日には、早朝に出発して、有名な須磨の浦を眺めながら行つたところ、空は曇つて、島の輪郭さえはつきりわからない程度であつたが、海面がうららかに青く広がつてゐる様子は、いつもより美しく見えた。誰かが、「次のように歌に詠んだ。」

淡路島「あれは」と淡く見わたす「海松布ならぬ」見る目さえも霞に込められた春の海面

あの旧知の人が、酒や肴などを捧げさせて、ここまで送つてくれた。浜辺におりて、酒をのみ弁当を食べた。月のある時分であれば、ここにとどまつて夜とともに「月を」眺めたであろうものを、残念である。

筝曲の「須磨組」という曲に「明石の月と須磨の月を、信濃更級の月とならべて」、「さらしなの月ともにながめあかさん」と歌つてゐるのは、いかがなものであろうか。この須磨の浦「の月」こそ、まことに並ぶものがないのに、不十分にも、このように（更級の月）ときと同列かのよう）けなしてゐるのは残念である。ならば、どうして「このままで」よからうか。内記に「作り直せ」と言つたところ、「須磨」というのも海岸の名、「明石」というのも海岸の名である。月も丸く、丸屋（粗末な住居）の住居で夜を明かしかねてゐる浦人は、このようであるうか」と詠んだので、皆が面白がつた。

【校異】*須磨組 新田本「須ま組」。*くちおしきや 新田本「くちおしきわざや」。*引なをせ 新田本「ひきなをせ」。

【注】
○淡路島 濱戸内海東部の島。須磨海岸の対岸にある。○あは 「あは（あれは）」と「淡」とを掛ける。○みるめ「見る目（遭う機会）」と「海松布（ミル科の海藻）」とを掛ける。
『新古今和歌集』雜上に凡河内躬恒の歌として「淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵は心からかも」とある。これを踏まえて、『源氏物語』第十三帖「明石」に、光源氏の歌として「あはと見る淡路の島のあはれさへ残るまなく澄める夜の月」（「あれは」と「海を隔てて」）淡く見える淡路島の情趣さえ残す影もない、あかるく澄んだ夜の月」とある。また同じく第十八帖「松風」に、光源氏の歌として「めぐり来て手に取るばかりさやけきや淡路の島のあはと見し月」（近づいて手に取れそなほどはつきり見える、淡路島の、淡く見える月）とある。

○さらしなの月とともにながめあがさん 八橋検校（一六一四～一六八五）の箏曲組歌のうち「須磨」の第一唄に「須磨といふも浦の名 明石といふも浦の名 更科の月ともに眺めていざや明かさん」とあり、同じく第五唄に「三五夜中の新月 畏なきぞおもしろや 千里の外の人 までもさぞや眺め明かさん」とある。履軒はこれらを引用したものであろう。○まるや 月の「丸さ」と「丸屋」（粗末な小屋）とを掛けける。○すま 「須磨」と「すまゐ」とを掛けける。○あかし 「明石」と「明かし」とを掛けける。なお、『古今和歌集』に「読み人知らず」として、「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしづ思ふ」とあり、或説として人麻呂の歌とする。これを踏まえたと思われる落語「和歌三神」に「ほのぼのとあかしかねたる冬の夜にちぢみちぢみて人丸くねる」とある。また『源氏物語』第十三帖「明石」に「旅ごろもうらがなしさにあかしかね草の枕は夢もむすばず」とある。

『一〇』岸のかたの屋に、里人あつまりて、酒のみゐたるに、内記この歌をかいつけてやりける。「これなんやんごとなきあたりにて、けうぜさせ給ふぞ、うたひて酒すゝめよ」といひければ、里人らよろこびまどひて、みなくこゝにきてぬかをつく。「あやしの山がつの、処けがしにさぶらふ。やまと歌などは、聞もおよばず。さるは今やうのひとふしも、処の名のいりたるを、あき人のたよりに、都にあるかぎり、ならひ伝へて、心やりにしけるを、いまおしへ給へることばな

ん、ことじめでたきを、いまだしりさぶらはず。このかしこまりに、おまへにぬかをつくなり。よくもぞ都人のめぐりあひたまへるかな。人まるの明神のおんめぐみなるべし」とぞ。むかしもいまも、ひな人はすぐよかにまめなりかし。ないきはたへず、はしり出て、松陰にわらひたふれて、しぬべくありける。さてぞしれるが子にわかれてゆく。

【現代語訳】岸辺の家屋に里人が集まつて酒を飲んでいたところに、内記がこの歌（「須磨組」の改作）を書き付けて贈つた。「ふさけて」「これは、高貴な方々のところで楽しまれた歌であるぞ、詠じて酒を重ねよ」と言つたところ、里人らは喜びあわて、皆こちらへ来て、額を地につけて拝んだ。「村人らが言うには」「賤しい山人の処けがしでござります。和歌などは聞き及ぶことがありません。そうではありますが、箏曲の一節も「この」處の名の入つているのを、商人の口伝てに、都にあるかぎりを習い伝えて、心の慰みにしておりましたが、いま教えていただいた歌詞こそ、とりわけ立派であるのに、これまで知りませんでした。そのお礼に、御前に額をついております。よくも都人に巡り会うことができたものです。〔柿本〕人麻呂の明神の御恵みでありますよう」ということである。昔も今も、田舎者は素直で生真面目である。内記は堪えきれずに走り出て、松の木陰で笑い転げ、死にそうになつてゐた。さて、旧知の人に別れて出発した。

【校異】*あやし 小天地閣本「ああやし」。*むかしも 新田本「昔も」。

【注】○人まるの明神 享保九年（一七二三）、朝廷から「明石人丸神社」に対して正一位が贈られ、祭神を「柿本大明神」、社号を「柿本社」とするとの宣命が下された。現在、明石市人丸町に柿本神社がある。

なお人麻呂の神格化は、平安後期以降、住吉明神や玉津島明神との習合によって進行したとされる。

まさなき心あてなるや。

【現代語訳】内記は幼い時からこの道は踏み慣れていたのだが、ここ十年ほどは見ていなかつた。舞子の浜という所で、松の緑が昔と変わらず立派であるのを見て、「次のように歌に詠んだ。」

《一一》内記のいときなきより、この道はふみならしてしを、

十年ばかり見ずなりにける。舞子浜といふ処にて、松の緑の、昔にかはらず、めでたきをみて、

あさみどり 松はいろそふ 春雨の

ふり行われぞ わびしかりける

なをゆきゆけば、あかしの浦となん。すべてこのあたりは、

あやしの浦人のすまゐなるに、みすめく竹すだれかけわたしたり。むかしより、さすらへびとのおほくすみつきたる、そ

のなごりとぞ、人のいふなる、げにめづらかなるさましたるものかな。いまもさは、よしある人の、かくぞ一処にもあるらん、いかにおもふ人のこひしかるらんなど、あやなくあはれび、おしはかり給ひて、

なきくらし おきてあかしの 浦人は

みるめをなみに しほたれぬらん

【校異】*舞子浜 小天地閣本「舞子の浜」。*緑の昔に 新田本「緑昔に」。*むかしより 新田本「昔より」。*さすらへびと 新田本・

小天地閣本「さすらへ人」。*いかに 小天地閣本「いかにも」。

泣き暮らし「眠れずに」起きて夜を明かす明石の浦人は、「海松布を波に濡らすように」見る目を涙で濡らしていだである。〔これは〕的外れの推量であろうか。

【注】あさみどり…歌 ○より行われぞ 雨が「降る」と年月が「経る」とを掛ける。

《なきくらし…歌》○おきてあかし 『後拾遺和歌集』に伊勢大輔の歌として、「おきあかし見つながむる萩の上の露吹き乱る秋の夜の風」とある。『新古今和歌集』に俊成の歌として、「あまのかるみるめをなみにまがへつゝなぐさのはまをたづねわびぬる」とある。「あかし」は第九段注を参照。○みるめ 第九段注を参照。○なみ 「波」と「涙」とを掛ける。○しほたれ 「海水が滴る」と「涙で濡れる」とを掛ける。

《一一》この夜は、か二河という処に、やどりもとめて、枕とりよせて、足をすみさまにやりて、かしらばかり、ひと処によせて、うちかたらふに、かの里人のなごりおぼえて、なをわらひあへる。「今やうのこと葉は、わづらはしけれど、心のどがなるふしへあるものなり。これをからうたの文字にうつしたらんは、いかならん」といふ。野生「こゝろみに」とて、「飛鳥川」を、

決彼飛鳥之源 彼の飛鳥の源を決し、
注此研石之淵 此の研石の淵に注ぐ。
愁腸兮写不尽 愁腸 写して尽くさず、
微命兮不期昏 微命 昏を期せず。

「墨田川」を、源生、

離故土兮遠來 故土を離れ 遠く來り、

暮度兮墨之水 暮に度る 墨の水。

眄京鳥兮借問 京鳥を眄て 借問す、

生死兮我所思 「生けるや死せるや 我が思う所は」と。

はかせうち聞て、「われも」とて、

珠浦秋風兮 珠の浦 秋の風

波濤撼枕兮 波濤 枕を撼かす

藉袖袂兮我独臥 袖袂を藉きて 我独り臥ぬ

夢不成兮夜又夜 夢成らず 夜又た夜

これは「心づくし」なりけんかし。かくいひくて、ねにけ

る。内記はなにやらんうめきたまひけるがまゝに、いびきと

なりぬ。

【現代語訳】この夜（三月五日の夜）は、加古川という所に宿を求める、枕をとりよせて、足を隅のほうへやり、頭だけを一箇所に寄せて話し合うに、かの里人のことを思い出し、さらに笑いあつた。「筝曲の歌詞は、複雑だが、心が落ち着いてのんびりする所もあるものである。これを漢詩の文字に訳してみるのはどうだらう」と言つた。野生が「ためしに」と言つて、「飛鳥川」を、「次のように漢詩に訳した。」

あの飛鳥の源より溢れ出て、この硯の淵に注ぐ。悲しい心は描写し尽くせない。幸薄き命は夕暮れまであるかどうかわからない。

「隅田川」を、源生は、「次のように漢詩に訳した。」

故郷を離れて遠くまで来、夕べに隅田川を渡ろうとした。「たまたま」都鳥を見て問い合わせる、「生きているのだろうか死んでいるのだろうか、私が愛する人は」と。

博士が「これらを」うちききて、「自分も「作ろう」と言って、

須磨の浦に秋の風。波濤が枕をうかす。衣を敷物として私は独り寝る。夢を見る」ともない、夜また夜。

これは「心づくし」だったのだろうなあ。このように言いあいながら、寝てしまった。内記はなにやら呻いていたが、そのままイビキとなつた。

【校異】*なり 新田本「名なり」。*京鳥 小天地閣本「京馬」。

【注】○かこ河 今い兵庫県加古川市。○飛鳥川 八橋検校（第九段「さらしなの月」注参照）の筝組曲「心づくし」の第五歌「飛鳥川の水上を硯の水に堰入れて書く言の葉は尽きまじや今日も暮さん命かな」を指す。歌詞は『古今和歌集』の「あすかがはふちはせになるよなりとも思ひそめてむ人はわすれじ」（よみ人しらず、巻十四恋歌四）、『新勅撰集』の「四方の海を硯の水に尽くすとも我思ふこと書きもやられじ」（皇太后宮大夫俊成、雜）を踏む。下に見える「隅田川」「心

づくし」もこの筝曲の歌詞。平野健二『三味線と筝の組歌』（白水社、

一九七八年）参照。○研石 砚のことで、深い淵を喰えている。○隅

田川 筝組曲「心づくし」（前出「飛鳥川」注参照）の第二歌「名にをはるばると隔ててここに隅田川都鳥に言問はん君はありやなしやと」を指す。歌詞は『古今和歌集』（業平朝臣、巻九鶴旅）の「名にしおはばいざ言問はむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」を踏む。な

お『古今集』の詞書に以下のようにある。「武藏国と下総国との中にある隅田川のほとりにいたりて、都のいと恋しうおぼえければ、しばし川のほとりにおりゐて（中略）さる折りに、白き鳥、嘴と脚と赤き、川のほとりに遊びけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人見知らず。渡守に『これは何鳥ぞ』と問ひければ、『これなむ都鳥』と言ひける

を聞きてよめる。○心づくし 筝組曲「心づくし」（前出「飛鳥川」注参照）の第二歌「心尽しの秋風に須磨の浦廻の波枕衣片敷に独り寝に夢も結ばぬ夜な夜な」を指す。歌詞は『源氏物語』須磨卷「須磨にはいとど心づくしの秋風に…」、『金葉集』の「思ひやれ須磨のうらみて寝たる夜の片敷く袖にかかる涙を」（太宰大式長実）を踏む。

《一三》六日の暮つかたにぞ、いぼの湊にはつきたれ。かの
おきな、いつしかといざり出て、ひさしくあひ見ざりつるお
ぼつかなさなど、聞えづけ、よろこぼひたまひたる。こと
はりにぞ。このはかせの父は、この國より出て、朝につかへ
たまひたるなれば、うちとのしづく、たゞこゝもとにのみあ
りて、よるひる、おほくいりき、つどひたり。おとななどは、

ねびすぎ、老まさるもあれど、めかへして驚ろくばかりはあらねど、むかしみし児どもの、こよなうとゝのほりて、ものばぢがましげなるをんな、おゝしきおとことなりて、うちなみゐたる。「名のらづては、誰とやはしらん」と、いひさはぎたまへるも、わがかしらにふりけるゆきはしらずかし。

【現代語訳】六日の暮れころには、揖保の湊に着いた。あの「博士に手紙を寄こした」翁が、さうそく這い出でて、久しく見なくて気がかり「あつたのこと」となど、「博士に」申し上げ、お喜びになつた。「それも」当然である。この博士の父親は、この国出身で朝廷にお仕えになつたため、内外の親族は、ここだけにいるので、夜昼「限らず」多くやつて来て、集まつた。大人などは、年老いて、老けたものもあるけれど、見直して驚くほどではないのだが、昔見た子供達は大変成長して、恥ずかしげな様子の女性、雄々しい男性になつて並んでいる。「博士は」「名乗らなければ誰かは分からぬ」などと言つて騒いでいらつしやつたが、自分の頭に降り積もつた雪「のよくな白髪」のことは知らないのであるう。

子にまな酒さゝげさせて、「都のかたのまろうどにたてまつらん」とて、しきりにぬかをつくあり。「何者ぞ」ととふに、よじとて、舅姑にけうふかきものにぞありける。いやしき馬ひきのめなるが、おつとうせしより、世わたるわざなく、いやましにまどしかりけるを、このをうな、おりぬひやとわれわざして、舅姑をはぐゝみ、朝夕よくつかへまつり、つゆ心にたがふことなし。ちかきわたりの人、あはれがりなげきけるを、このはかせ、いたうものめでする人にて、さいつころ、都にて聞つけて、おのれはさらにもいはず、友人らをかたらひて、しろがね、こがね、ぬのなど、そくばくおくり給ひける。そのかしこまりまうすなり。はかせ盃とり出て、なをことのよし、たづねなどして、かへしぬ。このむすめも、母に似て、けうある者とぞ。

【現代語訳】見も知らぬ姫で、老いた翁の手を引いて、女の子に肴と酒とを差し出させて「都の方の客人に奉るう」と「言つて」、しきりに額づく者がいた。「何者だ」と問うと、よじという、舅姑に孝の深い者であった。賤しい馬引きの妻だったが、夫が死んでから、世渡りの仕事は無く、ますます貧しくなつたのを、この姫、機織りや縫い物の雇われ仕事をして舅姑を養い、朝夕よくお仕え申し上げ、全く舅姑の心に違つことは無かつた。近くの辺りの人が、哀れがつて嘆いていたのを、この博士は感動しやすい人なので、先頃都で「このことを」聞きつけて、自分はもちろんのこと、友人らとも相談して、銀・金・

布など、たくさんお送りになった。そのお礼を申し上げるのであった。博士は杯をとり出して、また事情を尋ねたりして帰した。この娘も母に似て、孝行者だということだ。

挾み給ひたるに、先だつものは涙なり。はかせ、
苦むして わかちかれたる 石ぶみを
あらぶは袖の 涙なりけり

【校異】*老たる翁 手稿本は「老の翁」の「の」を見せ消ちにして右横に「たる」と記す。小天地閣本・中之島本・新田本「老たる翁」。

*何者 新田本「何もの」。*めなるが 小天地閣本「めなるか」。*おりぬひやとわれわざして 小天地閣本「おりぬひ」なし。*あはれがり 手稿本「あはれがりて」(「て」を見せ消ち)。小天地閣本「あはれがりて」、中之島本・新田本「て」なし。*いたう 小天地閣本「いとう」(「と」を「た」に見せ消ち)。*給ひ 小天地閣本「たまひ」。*益とり出で 小天地閣本は「益」を「さかすき」(「す」を見せ消ちにして「さ」)。中之島本は「と」を「を」に作り横に「と」と附す。*者 小天地閣本・新田本「もの」。

ないき、

むかししのぶ 涙は袖に せきあへず
苦の下にも しみやわたらん

あたらしき塚の、四五あるを、「これはたれ、かれはそれ」とさしおしへたるを、まことともおぼえずげに、内記、なき数の そぶにつけても かなしきは
ありとはしらず 露のこの身を

あねの君、ないきの袖をとらへて、

ともにみし 人はしるしと なりぬなり
われはたいたく おひにけるかな

「命のかぎりしは」こと、内記とともに、涙をひとめうけて、「君たちは、なき世までもこゝにこそ。土偶人のたとひの」と、なをいとめでたし。朝にひまなき身は、都にてしぬべくあれば、この数にはゑこそいらね。なを命のうちにこそ」とて、

『五』十一日、ぞくの墓おがみにとてゆく。博士のあねなる、妹なる、いとこなる、おばなる、そが子なる、みなつれだちたり。山にまうできて、木の葉かきはらひ、水そゝぎ、

契りおきて またもとひこん ある里の

桜の雪と うりつまぬまに

【現代語訳】十一日、一族の墓を拝みに行く。博士の姉・妹・いとこ・おば・その子供などが皆連れ立つ「て行つ」た。山に詣で来て、木の葉を搔き払つて、水を注ぎ拝みなさるにも、先づ涙が流れ出るのであつた。博士「は次のように歌を詠んだ。」

苦むして、判別しかねる様になつた碑を、洗うのは袖を濡らす涙である」とよ。

内記「も次のように歌を詠んだ。」

昔を偲ぶ涙は、袖では塞き止めこらえる」とはできず、苦の下にも染み渡るだろう。

新しい塚の四つ五つあるのを、「これは誰、それは誰」と指し教えるのを、本当とも思えない様子で、内記「は次のように歌を詠んだ。」

亡くなつた人の数が加わるにつけて哀しいのは、露のようにはかないこの身のい今まで生きているか知れないことだ。

姉の君が、内記の袖を掴んで、「次のように歌を詠んだ。」

「かつて」共に見た人は墓標となつてしまつた。私もまた大変老いてしまつたよ。

「命のある限りは来なさい」と言い、内記も共に目に涙を一杯浮かべて、「あなた方は、あの世までも」と「居る」とができる。「」

の土地の土に戻れる」土偶人の例のようで、それでもまだ大変めでたい。「私のような」宮仕えに暇なき身は、都にて死ぬようには決まつてあるから、この数に入ることができない。まだ命のあるうちに」と言つて、「次のように歌に詠んだ。」

約束しておいて、また訪ね来よう。故郷の桜が雪と降り積まない間に。

【校異】*水そそぎ 新田本「水そそぎ (き) て」。*給ひたる 新田本「たまひたる」。*わがちがれたる 小天地閣本「れ」を「ね」に見せ消ち。新田本「ね」。*むかし 新田本「昔」。*涙 新田本「なみた (だ)」。*わたらん 新田本「わたらむ」。*四五 新田本「よつ五」。*おぼえ 小天地閣本「おぼる」。*契り 小天地閣本「ちぎり」。

※新田本は底本の十四葉表三行目「なき数」より十六葉裏五行目「おもひたらず」に至る部分が落丁。

【注】○土偶人 雨が降ればどこかに流されてしまう木偶(木彫りの人形)に対し、土偶は溶けて土に帰ることができる、の意。「土偶人曰、我生於土、敗則帰土。今天雨、流子而行、未知所止息也」(『史記』孟嘗君伝)。

〈契りおきて…歌〉○うりつまぬまに 「降り積まぬ間に」の誤記か。

なる父母の、まじしくすめる、道のほど二十町ばかりなるを、雨にも、風にも、日^ノとに通ひて、くひ物、きるもの、けがれたるものを見へに、とりまかなひて後ぞ、わが屋^{*}にはかへる。いつも巳の時にゆきて、ひつじさがりて帰る。十年あまり、ひと日もたゆむことなし。今は母はうせて、父九十余年り。夫もなくなりて、そが子なん、家のわざして世をわたる。はかせこのをうなをみんとて、十二日、例の人々ともなひてゆく。「けふも親の家にゆきて、いまだ帰らず」といふ。ほいなくて、おりりものとじめおきてかへりぬ。またの日なん、かのをうなまいりかしこまりて、あひみたまひし。

【現代語訳】この「担保の」湊に、親孝行の嫗がいた。八十歳ほどになる父母が、貧しく住む、道のりは二キロメートルほどの「どころ」を、雨の日にも、風の日にも、毎日通つて、食べるもの、着る物、汚れ物までも、世話をした後に、我が家に帰つていた。いつも午前十時頃に行き、午後二時頃を過ぎてから帰つた。十年ほど、一日もたゆむことがなかつた。今は母は亡くなり、父は九十余歳である。夫も亡くなり、その子供が、家業をして世を過^ごしていた。博士はこの嫗を見ようと思い、十二日に、例の人々を連れて行つた。「博士達が家に行つたところ」「今日も親の家に行つて、まだ帰らない」と言う。残念であるが、「博士達は」贈り物を残して帰つた。他日に、この嫗が参上し礼を言い、御対面なさつた。

なる父母の、まじしくすめる、道のほど二十町ばかりなるを、雨にも、風にも、日^ノとに通ひて、くひ物、きるもの、けがれたるものを見へに、とりまかなひて後ぞ、わが屋^{*}にはかへる。いつも巳の時にゆきて、ひつじさがりて帰る。十年あまり、ひと日もたゆむことなし。今は母はうせて、父九十余年り。夫もなくなりて、そが子なん、家のわざして世をわたる。はかせこのをうなをみんとて、十二日、例の人々ともなひてゆく。「けふも親の家にゆきて、いまだ帰らず」といふ。ほいなくて、おりりものとじめおきてかへりぬ。またの日なん、かのをうなまいりかしこまりて、あひみたまひし。

【校異】*屋 小天地閣本「や」。*ひと 小天地閣本「一」。
【注】○親にけうぶかきをうな この孝婦については、高尾義典著「八木氏が妻其父に孝行の事」(股野玉川著『播州龍野四孝伝』所収)に詳しい。これによると、女の名は「はつ」と言い、明和六年(一七六九)の歳に藩侯より褒賞された、とある。解説参照。○町 六十間で一町。一町は約百メートル。

『一七』またさい村といふ処に、めしゐあり。子もなく、はらからもなし。そが妻なる、夜は麻を手まさぐり、昼はめしゐの手を引て、かなたこなた、よろぼひありきて、よねをこひて、世を過^ごしける。二十余年おなじさまなり。これはなをざりのかたいめのやうなるを、そのさまのいとまめまめしきがあはれなりとて、國の守より、よねたばひたることあり。博士の道に行あひ給ひたるには、ものなどとらせたり。

【現代語訳】またさい村といふ処に、盲目の人がいた。子供もなく、親族もいない。その妻は、夜は麻縷を手でよりあわせ、昼は盲目の人の手を引いて、あちらこちら、よろよろと歩き、米を乞うて、生活していた。二十余年ずっとそうであった。これはいいかげんな乞食のようではあるが、その様子のとても極めて誠実であるのが哀れである。国守から、米を賜つたことがあった。博士が道で行き会われた時には、ものなど与えていた。

【注】○さい村 現在の兵庫県龍野市揖西町佐江村を指す。○麻を「麻苧」。麻の茎を細かく裂いて作った糸。または麻。○かたいめ「乞食妻」(女)。

物の怪までも憑き、突然に「妻を」連れて、故郷に下つた。とても恐ろしい物の怪憑きであり、近寄る人もいなかつたが、この女は、朝も晩も離れなかつた。そうではあるが、「物の怪憑きは」大声で騒ぎ立て、あるいは踏み苛んで、「妻は」死にそうになることが度々あつたが、少しも恨んだ様子が無かつた。

『一八』おなじ處に、照円寺といふ住持の僧の弟に、教順が妻なむ、世にためしすくなきまめ人にぞありける。教順がわかき時、たにはにいきてすみける、その時ゑたる妻なり。さいはひなく、さすらへて、難波に移りすめる。いとまどしかりければ、はらからなどは、「いざ帰りね。外によすがもどめてよ」といふを、聞もいれず。三とせばかんありて、この教順、物のけさへそひて、にはかにつれて、ある郷にくだりぬ。いとくおどろしきものゝけにて、よりそふ人もなきを、このめなん、よるひるはなれず。さるは、うちのゝしり、あらはふみさいなみて、しぬべくある」とたびくなるを、つゆうらみたるけしきなし。

【現代語訳】同じ處に、照円寺という住持の僧の弟の、教順の妻「である」、世に稀な実直な人が居た。教順が若い時に、丹波に移り住み、その時に娶つた妻である。「夫婦は」幸薄く、放浪して、難波に移り住んだ。とても貧しかつたので、「妻の」親族達は、「さあ帰つてきなさい。外に頼りを求めるよ(故郷に戻り、他に頼りとなる夫を求めるよ)」と言うが、「妻は」聞き入れなかつた。三年ほどたつて、この教順は、

【注】○照円寺 龍野市揖西町佐江に現存する。第一七段「さえ村」注、および口絵写真を参照。○教順の妻 貞婦の名は「さん」といい、子を亡くして心を病んだ夫「教順」によく仕えた。「さん」については、石原公章著「播州佐江村貞婦小伝」(股野玉川著「播州龍野四孝伝」所収)、竹山著「貞婦記録」(『懐徳堂五種』所収)に詳しい。解説参照。

『一九』兄の僧は、心づよきものにて、さしもおもひたらず、寺のかたへに、かたつむりの屋のやうなる庵をつくりて、ものゝけひとりがくひものを、田^ノとにおくる。妻とふたりの子とは、たれかはしらん。さるは、糸をくり、布をおりなどして、すぐしける。くひものなどは、さらに人のくふべきものにもあらず、それだになき日もありとなん。はらからは、いやましに「かへれ」とせむるを、「かくおどろくしきものゝけを、たれかはうしろみ聞えん。さなきだに、『帰らじ』とちかひてしを、いまは命をかぎり」とてぞ、やみける。

【現代語訳】兄の僧は、情が薄く、思いやりを施さず、寺の隅に、狹くみすぼらしい庵を作つて、「弟を住まわせ」物の怪憑き一人の食べ物を、毎日届けた。妻と二人の子と「のこと」は、「誰が面倒をみてくれるだろうか」「誰も面倒を見てくれなかつた」。【妻と二人の子供は】あるいは、糸を紡ぎ、布を織つたりして、生活した。食べ物などは、

全く人が食るものでは無く、それさえ無い日も有つた「と言うことだ」。親族は、いよいよ「帰れ」とせき立てるのを、「妻は」「このようにおどろおどろしい物の怪憑きを、誰がお世話をするのか。そうでなくとも、『帰らない』と誓つたのを、今は命の限り「世話をする」と言つて、そうするのをやめた。

【校異】*屋 小天地閣本「へや」。*え 小天地閣本「へ」。

【注】○心づよし 情にほだされない。つれない。○かたつむりの屋みすぼらしい仮の家。

《二〇》冬のさむき夜しも、物のけは、あかはだかにて、庭にたゞすめば、妻もおなじ」と、衣ぬぎて立そひゐるを、里人見とがめて、いさめける。「ものゝけはねちつよきものにて、さむさをだにしらぬなれば、いかゞはせん。たゞの人の、なでうさるわざあらん。いたづきのいるべく、いとおろかなわざなり」といふに、「それをしらぬにしもあらねど、おつとのさむき庭にゐ給へるを、ひとり内にゐてあたゞかにあ

らんは、わが心とてゑせず」と、たへける。その心もちひ、皆みなかうやうなる。「げにめづらかなるまめ人かな、女のためしにしつべき」と、博士また例の人々引つれていきたり。

【現代語訳】冬の寒い夜であつても、物の怪憑きが、丸裸で、庭に併めば、妻も同じよううに、衣を脱いで立つて傍らに寄り添つてゐるのを、里の人が見とがめて、諫めて、「物の怪憑きは体温が高く、寒ささえ知らないのだから、何ともない。普通の人が、どうしてそのような行動が出来るか。「そんなことすると」病気になるし、とても愚かな行動だ」と言つたが、「それに対して彼女は」「私も」それを知らぬではないが、夫が寒い庭にいらつしやるのを、一人「家の」中に居て暖かでいるのは、自分の気持ちとしてはすることが出来ない」と答えた。その心遣いは、万事このようであつた。「本当に世に稀な実直な人だ。女性の手本にするべきだな」といつて、博士はまた例の人々を引き連れて「この彼女のものとに」行つた。

【校異】*しらぬにしも 中之島本「しらぬにも」。*給 新田本「たま」。*心もちひ 中之島本「心もち」。*皆 新田本「みな」。

【注】○ねち 热。

《二一》かのかたつむりの屋を見いれたるに、しきいもさく、

ひとへむしろをしきたり。人はあらず、こゝかしこたづぬるに、小河におりて菜をあらふ女あり。髪も衣も、かたいめのやうなれど、つらつきのきよらにあでやかなる。「かれにこそ」と、よりて問に、そなりけり。「やゝ」とよびとりて、庵に帰り、あるやうをとひきくに、ほとゝのどやかにうちかたらふに、みな人涙おとして、おぐりものとり出るほど、ものゝけ帰りきにける。人おそれするものゝけなりと聞て、あいなくて帰りぬ。かの物がたりのついで、「丹波国は、境をへだてゝ、文のたよりも、ひとゝせにふたゝびはせず」となげきけるを、「源生のいとこに、かの国司につかへたるあり。九鬼氏なり。しれりや」といふに、「ま」とさるおんながらひにや。その父の君は、おのれが父と、心しれる友になん。子なるは、はらからが文よむ友にて、「日」とによりむつび給ひし。今は父の君はなくなり給ひしにこそ」とて、涙ぐみたり。「おるは、そが方に文のたよりは、常にもあれば、いで致書郵せん。わがかたに文こせよ」といひければ、よろこぼひて、後にぞ文かきておこせたる。「こたみはいかなれば、かくばかり、孝あるもの、まめなるものに、数おほくあひみたることや」と、はかせのよろこぼひ給ひたる、ことはりなるや。

【現代語訳】その蝸牛の小屋をのぞき込むと、敷物ですら、一重の筵

を敷くだけである。人はおらず、こゝかしこ探し求めるに、小川に下りて菜を洗つてゐる女がいる。髪も衣も、乞食女ようであるが、顔つきは清らかにして艶やかである。「きつと彼女だらう」と、近寄つて問うと、そうであつた。「もしもし」と呼び寄せて、庵に帰り、有り様を問い合わせて、おおかたのどかに語らつたが、みんなは涙を落として、贈り物をとり出す頃、物の怪憑きが帰つてきた。人を怖れる物の怪憑きであると聞いて、仕方なく帰つた。その語り合いのおりに、「彼女は」「丹波の国は、境をへだてていて、文の便りも一年に一度もない」と歎いていたので、「私は」「源生の従兄弟に、かの国司に仕えている者がいる。九鬼氏という。知つてゐるか」と訊くと、「彼女は」「本当にそのような仲でいらつしやるのですか。その父君は、私の父と、心知れる友です。子は「私の」兄弟が「ともに」学問をした友にして、常日頃睦まじくなさつていました。今は父君はお亡くなりになりました」と「言つて」、涙ぐんでいた。「私が」「そうであれば、その「九鬼氏」の方に手紙の便りは、常に有るので、さあ書函を送ろう。私の方に手紙を寄越しなさい」と言うと、「彼女は」とても喜び、後で文を書いて寄こした。「今回はどうして、これほどまでに、孝行な者や、誠実な者に、数多く会つたことだろう」と、博士がとてもお喜びになつたのは、もつともであろう。

【校異】*かたいめのやうなれど 中之島本「かたいめのなれど」。
*間に 新田本・中之島本「とるに」。*文 手稿本「文がきて」(「かきて」を見せ消す)。*こたみ 小天地閣本「こだみ」。

【注】○しきい「む 「敷き蓆」。土間などに敷く荒く織つたむしる。

○九鬼氏 竹山著『貞婦記録』では「かの（さん）の親元は九鬼河内侯の臣にて」とある。

ちねの」の転用。

《一一一》おほぢの墓のあかほの郡にあるを、拜みにとて、十五日のつとめて、ふたりの生に、国つこのしたしき一三人つれていきけり。ないきも、おなじさまにいくべかりけるを、長谷のわたりに、母かたのおほぢの墓あるを、おがまんとて、おなじ日しも、引わかれてゆく。「いとけしかるわざや」と、人はいへれど、「たらちねの家つとは、これにまさるものやはある」と、心ひとつに思ひとり給ひて、ひとり立わかれたり、いとあはれなりや。

【現代語訳】祖父の墓は赤穂郡にあつたが、「博士はその墓を」拜みにといて、十五日の早朝、二人の学生と、「播磨の」国の親しい二三人と連れていった。内記も、同じ所に行くべきであったが、長谷の辺りに、母方の祖父の墓があるのを、拜もうとして、全く同じ日に、別れて行つた。「とてもけしからん」と、人は言うけれども、「内記は」「母へのみやげものは、これに勝るものはあるうか」と、決心なさり、一人立ち別れたのは、とても情の深いことではないか。

【校異】*母かた 新田本「ははかた」。

【注】○おほぢ 祖父。○たらちね 母の意。母に掛かる枕詞「たら

《一一二》上津といふ処に、しれる人あり。そが子なる、岡の翁にものまなびしける、これとつれてゆく。美作にも、しれる人のありける。博士のくだり給ひたりと聞いて、そが子を使におこせたる。その帰る道なれば、これもつれたり。上津は長谷にほどぢかき処なれば、そこにとまりぬ。山のかたそばに、家つくりおもしろくしたり。いたう心にしみて、

偶為山中客 偶たま山中の客と為り、
便得山中趣 便ち山中の趣を得。

青山与我静 青山 我と静かにして、
泉声滌我憂 泉声 我が憂いを滌^{あら}う。

青山窓外聾 青山 窓の外に聾え、

平田左右連 平田 左右に連ぬ。

一抹暮烟起 一抹の暮烟^{かみ}起ち、

俱在有無間 俱に有無の間に在り。

愛此山中宅 此の山中の宅を愛づれば、

山水為己有 山水 己が有するところと為る。

月出東嶺上 月は東嶺の上に出で、

亦照茅齋裏 亦た茅齋の裏を照らす。

この君は、いたうぶるき」とをめでしたふほんしやうにて、
韻なども、いにしへのをとりて、いまの世には、めなれぬ」とおばかり。

《一四》あけの日、かのはかに詣で、

【現代語訳】上津という所に、知人がいる。その子は、岡の翁に学んでいて、この者と連立つた。美作にも、知人がいた。博士が「大坂から」下つて来られたと聞いて、「美作の知人は」その子を使いに寄越した。「美作への」帰路なので、これも連立つた。上津は長谷にほど近い所なので、そこに泊まつた。山のそば近くに、家の構えが趣き深く建ててあつた。とても心にしみて、「次のように漢詩を作つた。」

偶々山中の客となり、たちまちにして山中の趣を得る。

青山は私と共に静かで、泉の声は私の憂いをぬぐい去る。
青山は窓の外に聳え、平らで広々とした田が左右に連なつていて。
一抹の暮煙が立ちあがり、みな有るが無いかぼやつと見える。
この山中の宅を愛でて、山水は私の物となる。

月が東の嶺の上に出て、やがて茅葺きの部屋の中をも照らす。

この君は、とても古いものを愛し慕う本性「を持つてゐる」で、「漢詩で踏む」韻なども、昔の「音」を取つて、今の世「の漢詩」では、目慣れぬ「韻を踏む」ことが多かつた。

【注】〈偶為山中客…詩〉○滌 「滌」は、洗う。
（青山窓外聲…詩）○平田 平らでひろびろとした田。

ありし世を しらですぎ」と なき跡の
しるしばかりを 見るぞ悲しき
たらちねの遠くへだよりて、なつかしうつきせすあはれに思
ふたまへる御心むけを、

身にそへて ともになくねを うば玉の
夜の台に いかで聞えむ*

これより帰るべかりけるを、かのみまさかなるが、あひみま
くほしさにぞ、其子とつれて、山路をたどりつゝゆく、杉が
坂をこゆ。はりまとみまさかの坂にて、建武のみかどの、塵
をかうぶりてこえ給ひし跡なり。

【現代語訳】明くる日、その墓を詣でて「内記は次のように和歌を詠
んだ。」

「存命中には、お目にかかる」ともなく過いしてしまつた。「今
となつては」亡くなつた跡の墓標しか、見る「ことができないのは
悲しいものだ。」

母が遠く隔たつた「大坂の」地から、懐かしくて尽きることなく感概深くお思いになるお心を、「次のように歌に詠んだ。」

身に携えて、一緒に泣く声を、暗い墓穴「にいらつしやるお爺様」に、どうにかしてお届けしたい。

それから帰ろうとしたが、かの美作にいる「知人」が、会いたいと言ふので、その子と連立つて、山路をたどりつに行き、杉坂を越えた。「そこは」播磨と美作との境で、後醍醐天皇が、塵を被りながらお越えになつた旧跡である。

【校異】*思ふ 新田本「おもふ」。*御心むけ 小天地閣本「御むけ」。*聞えむ 新田本「きこえん」。小天地閣本「聞ゑむ」。*こえ 給ひし 新田本「こえたまひし」。

【注】(身にそへて…歌) ○うば玉の 枕詞、「ねばたまの」の転。「黒」[聞]「夜」「夢」にかかる。○夜の台 「夜台」は墓穴の意。その「台」を大和言葉で「うてな」と読ませていて。

○建武のみかど 九十六代後醍醐天皇。後醍醐天皇は隱岐に流される途中、杉坂峠を通つていて。『太平記』卷四に、備前の武将兒島高徳が、後醍醐天皇をこの杉坂峠で奪還しようとして失敗したと見える。

《二五》暮つかたに、瀧もとの里にいたりぬ。かのあひしれんが家なり。このあるじは、博士の父にものまなびしたりし。

ざへかしこく、けうぶかくて、旌表をゑたるものなり。あざなを子華ときこゆ。そが子も、今の博士にものまなびたりし。よもすがらかたらひあかして、たゞひとり立帰り、また上津にとまりて、十八日、いばの湊に帰りきにける。はかせは、ふたひさきにかへりたまひぬるが、赤穂のことは、聞もらしつ。

【現代語訳】日暮れに、瀧の下の里に着いた。例の知り合いの家である。この主は、博士の父に学んだことがある。学問（漢学）に優れており、孝に篤く、「孝子として幕府に」表彰された者である。字を子華という。その子も、今の博士に学んでいた。夜通し語り明かして、ただ一人で帰り、また上津に泊まり、十八日、揖保の湊に帰ってきた。博士は、一日前にお帰りになつたが、赤穂のことは聞き漏らした。

【校異】*あひしれる 新田本「相しれる」。*ゑたる 新田本「得たる」。*かへり 新田本「帰り」。

【注】○瀧の下 岡山県美作町田殿の小字に瀧本がある。○ざえ 学問、特に漢学。○旌表をゑたるもの 「旌表」とは、人の善行を公表して衆人に知らせること。稻垣子華は宝暦十三年（一七六四年）に、孝子として幕府に表彰されている。寛政九年（一七九七）没。岡山県美作町田殿に弟子三十餘人が建てた彰徳碑がある。銘の撰文は中井曾弘（蕉園）。また別に昭和十三年建立の碑もある。口絵参照。

《二六》廿日には、あほしといふところに、みないきたり。湊の川しも、百町ばかりがほどなり。柴つむ舟にのりてぐだる。ひんだりは、野ひろく、山遠し。朝霧のたえまに、岡べの松、处处に見ゆ。右の岸は、山のすそなり。一町ばかりに山を見る所もあれど、おほかたは山の根をこぎめぐる。山をきりたらむやうなる高き岸に、松などさかさまに生て、おちかゝりたるおばかり。風もなく散花のおのづからに舟のなかにおつるもあり、山川のきよきながれの、さゝやかなる石の上をはしる。瀬々のさざ浪は、氷をゑりたらんやうなり。底はひら板なる舟の、こぎとほれば、玉をかきならす音なんしける。またふかき処は、青みわたりて、鯉などおほくあつまるどぞ。

【現代語訳】二十日には、網干といふところに、皆が行つた。「揖保の湊の」川下は、百町ばかりの距離である。柴を積む舟に乗つて、「川を」下る。「川の」左側は、平野が広く、山が遠い。朝霧の絶え間に、岡のはずれにある松が处处に見える。「川の」右側は、山のふもとである。一町ばかり「先」に山が見える所もあるが、大方は山のふもとを漕いで巡る。山を切つたような高い岸に、松などが逆さまに生えて、松が上から覆い被さりそうになつてゐるものが多くある。風もなく散花がおのづから舟の中に落ちるものもあり、山あいの川の清い流れが、小さな石の上を早く流れる。瀬々のさざ浪は、氷を彫つたようである。底は平板でできた舟が、漕いで通れば、玉をかきならすような音がする。

る。また「水の」深いところは、青み渡つて、鯉などが多く集まるということだ。

【校異】*朝霧 新田本「朝き（き）り」。*山を見る 新田本「山を見る」。*きりたらむ 小天地閣本「きりたらたらむ」。新田本・中之島本「きりたらん」。*高き 新田本「たかき」。*散花 新田本「ちる花」。*舟のなか 新田本「舟の中」。

【注】○あほし 「網干」。揖保川が播磨灘に注ぐ河口にある集落。今のは姫路市網干区。○町 六十間。約一一〇メートル。百町は約十一キロ。

《二七》都ちかきところならましかば、やかた舟に絲竹の音は、たへまあらじを。人々韻わかつて、から歌つくれりける。

蒼崖*与白水 蒼崖と白水と、
奇絶奪丹青 奇絶丹青に奪る。
幽賞欲凝目 幽賞目を凝らさんと欲するも、
舟輕不可停 舟軽く停まるべからず。

草樹倚懸崖 草樹 懸崖に倚り、
源生

湯漿廻其趾 漿を湯し 其の趾を廻る。

空翠染我衣 空翠 我が衣を染め、

飛花墜我卮 飛花 我が卮に墜つ。

内記

擊汰乱山影 撃汰 山影を乱し、

白鷗避舟起 白鷗 舟を避け起く。

舟過波紋定 舟過ぎて 波紋定まり、

鷗泛山樹裏 鷗は泛ぶ 山樹の裏。

博士

載酒扁舟下急灘 酒を載せ扁舟 急灘を下る、

急灘回転幾重巒 急灘 回転す 幾重の巒。

山色水容評未徧 山色水容 評未だ徧からざるに、

篙人已報是羅干 篷人 已に報ず 是れ羅干と。

内記はまた、ふな人のことばとて、

載薪樵兮水路熟 薪樵を載せ 水路 熟す、

夏日熱兮冬日寒 夏日は熱く 冬日は寒し。

此日何日兮遇公子 此の日何の日ぞ 公子に遇う、

續窈窕兮其鬼神 繼んにして 窕窕たり 其の鬼神。

水益清兮山益青 水益ます 清く 山益ます 青く、

花益妍兮我益老 花益ます 妍しく 我益ます 老ゆ。

懐公子兮不得語 公子を懷えども 語るを得ず、
独欵靄兮心之憂 独り欵靄として 心は之れ憂う。

まこと舟人の口より、かくいひ出たらんは、誰もく衣ぬぎて。
かづけましを。

【現代語訳】都に近いところならば、屋形船に音楽が絶え間ないだろうに。人々は韻を分けて、漢詩を作った。

野生

青ぐらい崖と白水と、「その」珍しさと素晴らしいは 絵画にまさる。

静かに鑑賞しようとして目を凝らそうとするが、舟は軽やかに下つてゆき停まることができない。

源生

草木や樹木は断崖に倚り、舟を漕ぐ櫂は「崖」下を巡り行く。
空の翠色は私の衣服を染め、散った花びらは私の杯に墜ちる。

内記

波に棹をさすと、「水面に映つた」山影を乱し、白い鷗は舟「が進んでくるの」を避けて飛び立つ。

舟が過ぎて波紋が静まると、山樹「が取り囲む流れ」の中で、鷗が「ふたたび波に」浮かぶ。

博士

酒を載せて小舟が急灘を下る。早い流れが幾重もの山々を巡る。

山や川の様子を一通り論せぬうちに、船頭はもう「ここらが網干だ」と知らせる。

内記はまた、船頭の言葉として、

薪を載せるよ、水路には慣れっこ。夏日は熱く、冬日は寒い。

公子にお遇いするなんて今日はなんと結構な日だ。盛んで奥ゆかしいその鬼神。

水は益々清らかで、山は益々青い。花は益々あでやかに「なるのに」、私は益々老いる。公子を心に思つても語ることはできず。独り溜息をつき、心は憂える。

本当に舟人の口から、このように言い出たなら、『説苑』の鄂君の故事のように「誰もが衣服を脱いで頭に被せて褒美にしただろうに。

【校異】*蒼崖 中之島本「蒼蒼崖」。*水容 小天地閣本「水客」(見せ消ちにし、朱筆で「容」に改める)。*編 小天地閣本「編」(見せ消ちにし、朱筆で「編」に改める)。新田本「遍」。*羅干 中之島本「網干」(「網」の横に「羅」をつける)。*ふな人 小天地閣本「舟人」。*水益清兮 中之島本「水益清」(横に「兮」をつける)。*誰も誰も衣ぬきて 新田本「たれもくきぬぬき(ぎ)て」。

【注】
《蒼崖与白水・詩》 ○蒼崖 青ぐらい崖。○奪丹青 「奪」は「压倒する、まさる」。「丹青」は「絵画」。○幽賞 心静かに鑑賞する。静かに味わう。

《擊汰乱山影・詩》 ○擊汰 波に棹さす」と。「汰」は「波」のこと。

（載酒扁舟・詩） ○扁舟 小舟。○箠人 船頭。

（載薪樵兮・詩） ○載薪樵兮 この歌に関わる資料として、新田本に『説苑』善説からの引用を記した紙片あり。全文は以下のようにある

（原文は句読点、括弧はなし）。「説苑 鄢君方汎舟於新波之上、乘青

翰之舟、張翠羽之蓋。會鼓鍾之音、越人擁楫而歌曰、『今夕何夕兮、塞洲中流。今日何日兮、得與王子同舟。山有木兮木有枝、心説君兮君不知。』於是鄢君捨袂而擁之、舉纊被而覆之。」鄢君と同舟できた喜び

を歌にした越人の舟人に対し、鄢君が褒美に着物を被せてやつたといふ話。○續 盛んなさま。乱れるさま。○窈窕兮其鬼神 『詩經』周南「閼閼雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。」とある。「窈窕」は奥ゆかしい、奥深い。前に「公子」(おそらく博士らのこと)とあるので、彼らの常人離れした奥ゆかしさを「鬼神」と表現しているのか。○欵靄 「欵」は、船頭が舟を漕ぐときに調子を合わせるために掛け合う声とも取れるが、ここでは「うらむ」「なげく」の意に取る。

「靄」は「靄靄」で、雲の集まる様となるように、嘆かわしい思いが鬱積した状態。○かづけ 前出「載薪樵兮」注参照。

《二八》ゆきつきてはまた、海舟にのりうつりて、なげ石といふを見にゆく。海の中に、いとおほきやかなる石、数しらず島の」とあつまりたり。誰にか、

あまかける 神の投げん 石なれや
うちよする浪に ゆるぐともなき

この石の上にて、酒のみうたひあそぶ。あは、さぬき、島々
みゆ。沖にはあまの小舟、島のこと、釣するあり、つなでひ
くあみのものおほかり。また誰にか、

いざこゝに釣するあまの すて小舟

なみにまかせて 世をやへなまし

うらやましげにおもふも、やすげなきうれへははたしらずか
し。

【現代語訳】行き着くとまた、海舟に乗り移り、投げ石というものを
見に行く。海の中に、大変大きそうな石が、数しえず島のように集ま
り立っている。誰かが「歌に詠んで」、

空を駆ける神が投げた石なのだろうか、打ち寄せる波に揺るぐ
ともないよ。

この石の上で、酒を飲み歌い遊んだ。阿波、讃岐「などの」、島々が
見えた。沖にはあまの小舟が、島のよう「海上に点々と浮かんでおり」、
釣しているものもあり、綱手繩で綱を引く舟も多い。また誰かが「歌
に詠んで」、

さあいこゝで、釣りをする漁師は、捨てた小舟のように、波にまか
せて、この世を過ぐすのだろう。

【漁師を】羨ましく思つても、【彼らの】不安な憂いはおそらく知ら
ないだろうよ。

【注】○あま 海人。男女を問わず、漁業や航海に従事する人々を言
う。○なげ石 兵庫県御津町刈屋の沖合にある、岩が寄り集まつて
できた小島で、現在も新舞子浜にある。口絵写真参照。

『二九』こゝのつかさなりける人、このごろ任はてゝ、のぼ
らんとすなる。よきげちや得たりけん。勢ひまうになりて、
友なびきたる。あないせる里人、岩かどにうちよせたる藻を
ひろひて、「これなんこむぶのりといふなり。これもて酒す
くめたてまつらん」とて、もて出ける。かの前司の前におきて、

うちよする 浪のもくずを とりぐに

君がさかへの かずとりにせむ

前司いたうけうじて、とりぐめぐる盃の、数しらずなりぬ。
さすがに、としがろすみなれたる浦のあまの、

もしほたれて わびつゝすぎし 年月も
よそのかごとに かこたれぬらん

と心のうちには思ひけめ。暮ちかくなるほど、風かはりたり。
浪あらし。「もとの道にはゑしも」と、いひさはぎて、ちか
き磯にこぎよせて、細道をたどりつゝ、塩やく処など見て、
かの里人の家にとまる。あけの日、室津にわたりて帰る。

【現代語訳】「この役人である人は、この「ころ任期が終わり、都へ上る」とするのだという。栄転の下命を得たのである。「その人の」勢いが盛んになって、友が頼りにして従つてゐる。案内をする里人が、岩かどに打ち寄せた藻を拾い、「これは昆布海苔です。これを「肴として」持つていきお酒をお勧めいたしましよう」と、持つて出る。例の前司の前に置いて、

打ち寄せる、浪の藻くずを「とる」ようになりどりの、君の繁栄の、数がぞえにしよう「この海草を数とりに使って一つ一つ数えましよう」。

前司は大変興じて、いろいろと酌み交わされる盃が、数も分からぬほどになつた。やはり、長年住み慣れた浦の漁師が、

塩水が藻塩草にしたたるように、「しおたれて」(涙に暮れて)侘びしく過ぎた年月も、よそ(次の赴任地)で愚痴られるのだろう。と、心中では思つてゐるのだろう。夕暮れ時が近くなるころ、風「の強さ」が変わり、浪が荒くなつた。「もとの道にはとても…「戻れないだろう」と言い騒いで、近い磯に「舟を」漕ぎ寄せて、細道を辿りながら、藻塩を作るのに海藻を焼く所などを見て、あの里人の家に泊つた。明くる日は、室津に渡つて帰つてきた。

【校異】*よきげちや得たりえけん。勢ひまうになりて 手稿本は「けふしも」を見せ消ちにし、この句を記す。新田本はこの句がなく、「けふしも」を作る。*岩かどに 新田本「巖かと (ど) に」。*こむぶのり 新田本「こむぶ (ぶ) のり」。*これもて 小天地闇本「これ

をもて」。*もて出ける 新田本「もていて (や) ける」。*前司の前におきて 新田本「前司のまへにおきて」。*かずとりにせむ 新田本「数とりにせん」。*いたうけうじて 小天地闇本「いとうけうじて」。*盃の 新田本「さかつ (ひ) きの」。*としごる 新田本「年」(ひ) ろ。*心のうち 中之島本「心の内」。*思ひけめ 新田本「おもひけめ」。*暮ちかく 新田本「くれちかく」。*もとの道 中之島本「もの道」(横に「と」をつける)。*いひさはぎで 中之島本「いひわき (ぎ) で」(「ら」の脇に「さ」を記す)。*塩やく 小天地闇本「鹽やく」。

【注】○げち 「下知」。下命。

(うちよする…歌) ○かずとり 数かぞえ。」では、海草を一つ一つ数えながら相手の繁栄や功績がいかに大きなものかを祝う場面。『散木奇歌歌集』第五祝部に、「君がへんやはよろづ代のかずとりであまのみ空におきたらはさん」という歌がある。○けうじて 歴史的仮名遣いでは、「けうじる(希有じる)」「きょうじる(興じる)」と使い分けがあるが、混同されたとも多かつた。」での「けうじて」は「興じて」ととる。

「もしほたれて…歌」 ○もしほ 「藻塩」。海藻に海水を注ぎ、塩分を含ませたものを焼いて水に溶かし、その上澄みを釜で煮詰めて作る塩。また、海藻にかける海水のこと。「しほたる」で、「塩水がたれる」と「涙に暮れる」の両方の意味がある。『古今和歌集』に「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつわぶと答へよ」とあるのを参考。○室津 今、兵庫県揖保郡御津町室津。揖保川下流から、直線距離でおよそ七キロ。室津に渡つた目的は、室津にある賀茂神社への参

《三〇》廿二日、河辺に出て、あそぶ。例の人々の外に、おほくともなひたり。網ひろげて魚とるもあり。竿もちてつるも、「あゆはまだいとちいさし、ますのいをはのぼらず」と、人々くちおしがりける。この国に、飢饉うちつづきて、民のわづらひありとて、制ありて、なべてよききぬをきることなかりき。さるは、をんななどは、いとわびしきことに、いひおもひける。されどそれながらにそうぞきつれたり、髪あげたるすがた、まへつかたは、いとひなびたるを、いまはさしもあらず、都のかたにあるとあること、みなうつしとりて、いまめかしう、ひな人とおとしいふべきかたはしもなし。内記うちみやりて、「いまは外にうつすべきものなし、たゞ心のあだなるのみぞ、なうつしそ」とのたまへば、ほゝゑみつゝ、つゝましさに、松陰にひきいりけり。この日なん、空のけしきのどかにて、いとけふありけりとなん。されどかきつべきことはなかりき。

【現代語訳】二十二日、川辺に出て遊んだ。いつもの人々の他に、多くの人を伴つて遊んだ。網を広げて魚を捕つてゐる人もいる。竿を持つて来て釣りをするのだが、「アユはまだとても小さいし、マスは上つて来ていない」と、人々は残念がつた。この国に飢饉が続いたため、

人々の苦労となるということで禁制が出て、いい服を着ることもなかつた。そこで、女たちは「それを」とてもつまらないと思っていた。しかし、「その女たちも」それ相応にめかし込んで連れだつてやつて來た。髪を上げたその様子は、以前ならとも田舎臭かつたのに、今はそれ程でもない。都あたりで流行しているものはすべて真似をして、当世風になり、田舎者だと見下されるような点はまつたくない。内記がそれを見て、「もうそれ以上、「都の人の」真似をするところはありません。ただ心の不誠実さだけは、真似をしないで下さい」とおつしやるので、微笑みながら、遠慮深げに松の木の陰に引き下がつた。この日は、空の様子がのどかで、とてもいい日だったということだ。しかし、書き残しておくほどの出来事は無かつた。

【校異】*網ひろげて 小天地閣本「網ひけて」(「ひ」と「げ」の間に朱筆で「る」を挿入)。*ますのいをは 新田本「ますのいをも」。
*そうぞき 中之島本「そよぞき」。*都のかたにあると 中之島本「都のこた」、新田本「ありと」。*いまは 新田本「今は」。*ひきいりけり 新田本「ひきいりけり」(「けり」を同じ「けり」に見せ消す)。

【注】○ますのいを サケ・マス類の魚を指すが、具体的に何の魚を指すのか未詳。○いひおもふ 「言ひ思ふ」。口でも言い、心でも思ふ。○そうぞく 「装束く」。装う、飾り立てる。○うつす 「写す」。真似する。模倣する。○あだなり 不誠実でいい加減だ。はかない。○ひきいる 「引き入る」。引き退く。引き下がる。○けふあり 「興あり」。趣深い。

『三一』廿四日、都に帰りのぼらんとて、とくおきて、もの

したゝめなどするに、「馬のはなむけせん」とて、処せくいりきたり。かのやまうも、この「ころうちつゞきて、おこたりさはやぎたまひぬるを見おきて、うしろめたうはあらずかし、「いま四年たちなば、今やうの人のする、『よねの賀』なるべし、その時にはかならず」など、聞えかはし、かへり申したまふに、あはれにおぼしつゞけて、「老木の桜またも」など、よみておくり物にしたまひける、かへし、

またこゝに君がよはひのやそぢあまり

やがてとつげて出たんはや

よろこぼひ給ふものから、さすがにゆくさきのさだめがたれに、うちしめり、涙を袖にかけながら、「ないきはいかに」と、聞えたまへば、

おひぬとも花さきまされまたもこん

春を契りて帰るうぐひす

おきなうちわらひて、「偽おほきものにもあらぬを、歌の心おぼつかなし、さるは、あけの年は、かならずとひきますや」と、さいなみたまへば、「あけの年も、その次々の年も、いまより後の春は、いづれも『こん春』とこそ申べけれ」といひければ、「また例のさるがう」とを」とて、たれもくわ

らひ出たる。

【現代語訳】二十四日、都に帰るうといふこと、朝早く起きて、書き物などをしてると、「人々が」「送別会をしましよう」と、所狭しと駆けつけて来た。あの「翁の」病気も最近はずつと快方に向かい、気分もよくなつていらつしやるのを見定めて、気がかりではなくつたのだろう、「あと四年経つたら、今時の人ができる『よねの賀（米寿）』ですね。その時には必ず「帰ってきますよ」」などと言葉を交わし、返事を申し上げなさるにつけて、感慨深くお思いめぐらしになり、「老木の桜またも」などと詠んで、贈り物になさつた。その返歌、

「あなたが八十八歳になる時に、またこゝに帰ってきますよ。四年くらいすぐに経ちますよ」と言い残して、旅立つことよ。

しきりにお喜びになるのだけれども、そうは言うものの自らの老い先の不確かさを思うと、涙っぽくなつてしまい、涙を袖で濡らしながら、「内記はいかがですか」と申し上げなさると、「内記は次のように歌を詠んだ。」

お歳を取つても、ますます花を咲かせてください。またやつて来ますよ。春にまた来ると約束して帰つていくウグイスのようになります。

翁は微笑んで、「偽りが多いわけではありませんが、歌の意味がおぼつかないです（期待できるかどうかわかりません）。それでは、来年は必ずいらしてくださるのですか」と責めなさるので、「来年も、その次の年も、将来の春はいづれにせよ『こん春（来る春）』と言うで

はありませんか」と言つたので、「またいつものようにおふさけになつて」と誰もが笑い出した。

【校異】*聞えかはし 小天地闇本「聞へかはし」（「へ」を「え」に見せ消す）。*よろこぼひ給ふ 新田本「よろこぼ（ぼ）ひたまふ」。
*さだめがたさに 新田本「さた（だ）めか（が）たきに」。*聞たまへば 中之島本・新田本「聞えたまへば（ぼ）」。

【注】○やまう やまい（病）のこと。○おこたり 病気が快方に向かう」と。○さはやぎ 病気がよくなること。○よねの賀 「米の賀」。
米寿のこと。○老木の桜 年老いた桜の木。第一段にも見える。
〈またここと歌〉○やそぢあまり 八十歳余り。「やがて」に連接し、「やそぢあまりや」で八十八歳に掛ける。○やがて すぐに。こ
こでは文脈から四年にあたる。

○よろこぼひ しきりに喜び。○さるがう 猿樂から転。滑稽な言動をすること。○こん春 「（来年以降の）一これから来る春」と「（履軒たちが）来る春」とを掛ける。

小篠の上を 露なわすれそ

人々いひつぎたりければ、いとおしがりて、かへしなどせま
ほしげに、かへりみしつゝ出給ふに、おくりの人おほく、も
のいひさはぎたれば、せずなりぬ。都にはいく日か帰りつき
けん、はりまの人はしらず。

【現代語訳】さあ、舟に乗つて出發する時になつた。とても名残惜しく思つて、女たちもみな戸口まで出てきた。誰の声だらうか、小さい女の子の声がした。

またいつ巡り会えるか分からぬ。風がそよいでいる笹の葉の上の「つゆ」（はかないもの）ではないが、私たちのことを「つゆ」（決して）忘れないでくださいね。

人々がその歌を伝え合つたので、「その女の子を」不憫に思い、その歌に返歌をしたそうな様子で、振り返りながら外にお出になつた。しかし見送りの人が多く、あれやこれやと言ひ騒いでいたので、結局返歌はできなかつた。

都に帰り着いたのは何日のことだらうか。播磨の人たちは分からなかつた。

《三一》いで汐に棹さして、たち出る。いと名こりおしとて、
をなんなども、みな戸のくちに出たり。誰にかありけむ、ち
いさきをんなこの声して、

めぐりあはん ほどもしらじを 風そよぐ

【校異】*をなんなども 小天地闇本「おんなども」。*戸のくち

小天地闇本「戸の口」。*誰にかありけむ 新田本「誰にかありけん」。
*をんなこの 中之島本「をんなの」。*はりまの人はしらず 諸本

は、改行してこの九文字を行末に記す。小天地閣本のみ改行せず。

【現代語訳】

辛卯の年（明和八年）の三月

泉が三つあり、左の泉は基がつていて、右は涸れています。

【注】（めぐりあはん…歌）○風そよぐ小篠の上を露なわすれそ 『新古今和歌集』卷十六の「風そよぐ篠のをささのかりの夜を思ふ寝覚めに露ぞこぼる」を踏まえる。○露 笹の葉の上の露と、副詞「つゆ」とを掛ける。

《末尾》

辛卯の年季春

檻泉三箇

檻泉三箇あり、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

左

は

壅

が

り、

右

は

涸

れ

た

り、

西に宅らしめ、…西成を平秩せしむ。（分担で和仲に命じて、西方に居らせ、…万物の成就を平均し、秩序づけさせた。）とある。ここで「郡を…和仲に従え」と言うのは、つまり「西成郡」のこと。

その国を知るうと思うのなら、長沮に聞け。

*長沮は『論語』微子篇に見える。「長沮・桀溺、耦して耕す。

孔子之を過り、子路をして津を問はしむ。（長沮と桀溺が並んで耕していた。孔子がそこを通りかかり、子路に渡し場を尋ねさせた。）とある。ここで「国を…長沮に聞け」と言うのは、つまり「（撰）津の国」のこと。

以上のことから、この末尾は次のように読める。

「中井積徳、大坂、浪華旧都、西成郡、撰津国。」

【校異】*辛卯の年 新田本「辛卯のとし」。

【注】この謎詩は、履軒著『通語』や『典謨接』の末尾にも見える。

解説

一 事実と虚構

これまで『昔の旅』は、その道中記的な内容から『紀行文』と見なされてきた。しかし、写本の一つ「新田本」には『旅のむかしかたり』と題されていることから察せられるように（四「底本・諸本」参照）、昔の博士

らの旅として語るという虚構を前提とするものであるから、厳密には紀行文とは言えず、『紀行体の物語』と見るのが妥当であろう。

とはいえ、明和八年（一七七一）の春に竹山・履軒が龍野を訪れたのは事実であり、のみならず作中人物の多くも実在する。例えば「（稻垣）子華」（訳注第二五段。以下、二五の如く表示。）や「よし」（一四）、「親にけうぶかきをうな（はつ）」（一六）、「教順が妻（さん）」（一九）、「親は、みな幕府・領主から褒章を受けた孝子貞婦である（三「孝子貞婦の顕彰」参照）。また博士一行に送別の詩を贈った「与隣」「彪外」「子淵」（三）も懐徳堂と関わる人々であった。ここでは作中に実名では登場しない人物について、そのモデルを指摘する。

「岡の翁」 竹山・履軒兄弟の祖父玄端は龍野藩の藩医であった。兄弟の父斎庵（一六九三～一七五八）はその四男で大坂に出、藩医の家督を継いだのは玄端の次男、すなわち兄弟には伯父にあたる伯元（一六八八～一七七五）である。伯元は医業の傍ら書を読み和歌を嗜む粹人で「鳳岡」「睡翁」と号したが、それは「岡の翁」を連想させる。また明和八年は伯元の八四歳に当り、作中の「（岡の翁は）いま四年たちなば（中略）よねの賀（米寿）なるべし」（三）との記述に符合する。博士・内記の「おぢ」とされる「岡の翁」は、竹山・履軒の伯父伯元がモデルと見られる。

「文章博士」「内記」「文章博士」は竹山、その弟の「内記」は履軒、であることは容易に察しが付くが、作中の詩によつても裏付けられる。博士が送別の宴および揖保川下りの際に詠んだ詩「春酒ト良会…」（四）、「載酒扁舟下急灘…」（二七）は、ともに竹山著『眞陰詩集』卷四（辛卯、明和八年）にそれぞれ「与弟處叔之龍野留別諸友」「舟下羅干」の題で収録される。また博士は作中で「いたうものめでする人にて」と、その善行を賞賛する性格が描かれるが、これも実際の竹山と一致する。これらから、

基本的に竹山が「博士」のモデルであると考えられる。

次に「内記」は、作中に「この君は、いたうるき」とをめでしたふほんしやうにて、韻なども、いにしへのをとりて」(一一三)と描かれる。実際、履軒は古韻に关心が深く、自ら古体詩(古風とも称す)を制作し、作品集『履軒古風』もある。この龍野行きのあつた明和八年は、履軒が古韻に関する著作『詠韻璣』(明和六年)、『履軒古韻』(同七年)を著した時期と相前後しており、履軒の古韻への关心の高まりが、古韻を好んだと描かれる「内記」に反映していると思われる。加えて、内記が作中で詠んだ詩「載薪樵兮水路熟」(一七)は、実際に『履軒古風』卷三に「舟人詞」と題して収録されている。

このように物語および登場人物は基本的に事実にもとづく。もつとも、全てが事実を写しているとは言えない。例えば、作中に「今やう」(筝組曲)の歌詞を源生・野生・博士がそれぞれ漢詩に翻訳する場面があるが(一)、「この漢訳は履軒撰『履軒古風』卷三に「筝曲三首」の題で見える」とから、実際は履軒の作であろう。履軒は自作を博士ら三人に割り振ることで、三人が次々と翻訳を披露し合つて旅の一夜を楽しんだという虚構のエピソードを創り出したものと思われる。

虚構ということに関して言えば、『昔の旅』における最大の虚構は「昔の公家の世界」という設定である。これは履軒の公家世界に対するあこがれ(と同時にコンプレックス)の表れと見るべきであろう。だが、これも履軒の実体験が根底にある。履軒は、明和三年(一七六六)十一月、京都の高辻家から賓師として招聘され、翌四年十一月までの一年間京都に滞在した。高辻家は本姓が菅原氏、代々大学頭・文章博士の家柄で、当主の世長(後に胤長と改名)は式部大輔兼文章博士だった。なお、履軒著『華胥団語』所収「破腹巻記」でも、自らを武士として設定しており、履軒の自

意識として為政者に近いものがあつたことは注目すべきである。

このように、履軒は自らの京都体験に構想を得た『昔の公家の世界』を場とし、そこに和歌漢詩・虚構のエピソード等を盛つた。しかし、大筋となる龍野行き、登場人物など物語の骨格は事実に基づいている。作中の博士・内記の活動の一一つを事実とする根拠を示すことはできないが、細部は別として大略は事実を反映したものと考えられる。

二 旅程

『昔の旅』に記されるのは、三月三日夜の出発から三月二四日の別れまで二二日間のことである。その旅程の概略は次の通りである。特に記され場合は、博士・内記らの共通行動である(事項の下の(一)は該当箇所の段落番号)。

月日	事項(発着・通過・滞在等の地・主な出来事)
三月 三日	夜、送別会。難波より舟出。(一・三・五)
四日	明方、尼崎上陸。(一・五)
五日	甲山を望み、西宮、布引滝、湊川を経て、福原泊。(六・八)
六日	福原発。淡路島を眺め、須磨、舞子、明石を経て、加古川泊。(九・一・二)
七日	揖保(龍野)着。「岡の翁」と対面。貞婦「よし」が來訪。(一・三・一・四)
八日	——記述なし。——
九日	揖保。一族の墓参。(一・五)
一二日	揖保。孝女(はつ)を訪問するが、不在。(一・六)

一三日 捱保。孝女（はつ）が来訪。〔一六〕

一四日 さい村へ。盲人の妻に会う。貞婦（さん）を訪問（一
三日か）。〔一七・二二〕

一五日 博士は、文章生・知人二三人を伴い、父方の祖父の墓
参に赤穂へ出発。〔二三〕

内記は、上津の知人の子・美作の知人（稻垣子華）の
子を伴い、長谷へ母方の祖父の墓参に出発。上津（長
谷付近）泊。〔二三・二三〕

博士ら、赤穂より帰る。〔二五〕

一六日 内記、墓参。帰る予定を変更し、杉坂を経て、美作の
子華に会いに行く。子華宅泊。〔二四・二五〕

一七日 内記、一人で帰路につく。上津泊。〔二五〕

一八日 内記、揖保着。〔二五〕

一九日 —記述無し。—

二〇日 川舟で網干へ。海舟に乗り換え投石見物。投石付近の
民家泊。〔二六・二九〕

二一日 室津を経由し龍野着。〔二九〕

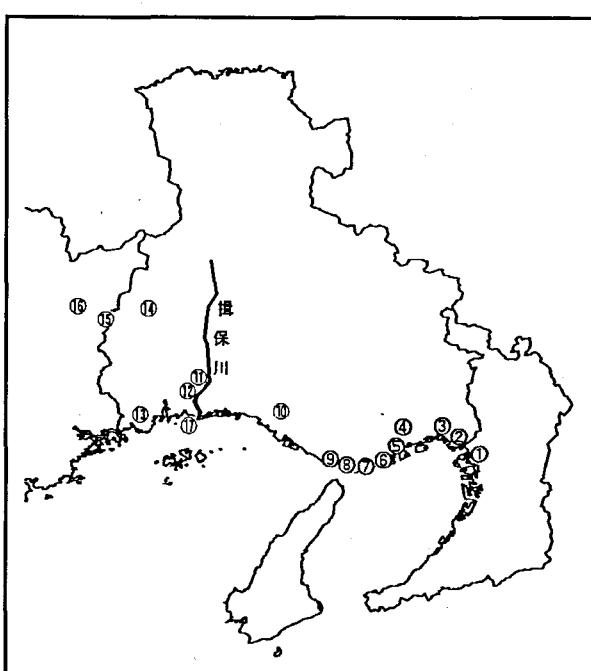
二二日 龍野。河辺での遊び。〔三〇〕

二三日 —記述無し。—

二四日 龍野の人々と別れ帰途に着く。〔三一・三一〕

履軒・竹山は何度も龍野を訪れているが、ある年の龍野行きの記録が履
軒の雑記帳『日録』（懐徳堂文庫所蔵）に見える。参考までに往路のみ抜
粂する。「十月十夜五時上船、四時尼崎着岸。十一日登岸、此夜宿明石大
倉谷。十二日高砂廻り、宿姫路。十三日五時入龍城。」この『日録』の旅

の場合、五時（二〇時頃）大坂で上船、四時（二二時頃）尼崎着岸、恐らく翌日早朝に登岸し旅立つたと思われ、ならば『昔の旅』と同様である。ただ『日録』の場合、十三日の龍野着の時刻は、姫路・龍野間が約一五キロと大した距離ではないことから、恐らく午前の五時（現在の八時頃）で、とすれば尼崎から龍野までに要したのは二日と数時間である。一方、『昔の旅』の場合は、三日目の夕方に龍野到着なので、ほぼ三日を費やしており、少しのんびりした旅だったと思われる。



（海岸線は現在のもの）

三、孝子貞婦の顕彰

『昔の旅』で注目されるのは、博士一行が「よし」（一四）、「親にけうふかきをうな」（一六）・「教順が妻」（一八）（二一）ら孝子貞婦に会い、その美德を称揚して金品を贈るなどしていることである。彼女らはみな実在し、後掲の資料から「親にけうふかきをうな」は「はつ」、「教順が妻」は

「さん」と知られる。「はつ」は明和六年、「よし」は同七年、「さん」は同八年五月に、それぞれ龍野藩主より褒美を受けている。^{（注）}のみならず各人の行状は、『孝婦鳴盛編』（明和九年一月）^{（注）}、『龍野鳴盛編』（刊年未詳）、『播州龍野四孝伝』（安永五年・一七七六年）によって紹介顕彰された。『孝婦鳴盛編』は股野充美の著で、「よし」の孝行を顕彰する股野の文章「龍野孝婦之小伝」、それと彼女を称賛する一二四名の漢詩和歌とから成り、竹山の寄せた跋を付している。『龍野鳴盛編』『播州龍野四孝伝』はともに、『孝婦鳴盛編』所載の股野の文章を主とし（漢詩和歌は載せず）、附録として「よし」以外の三人の孝子貞婦を顕彰する文章三篇を加えたものである。いわば『龍野鳴盛編』『播州龍野四孝伝』は股野の『孝婦鳴盛編』の増補版で、その内容は次の通り。（）に記したのはその文章が書かれた日付である。

股野充美著「龍野孝婦之小伝」

（「よし」のこと。明和七年閏六月二三日）

高尾義典著「八木氏が妻其父に孝行の事」

（「はつ」のこと。明和八年五月）

石原公章著「播州佐江村貞婦小伝」（「さん」のこと。明和八年四月）
小西尚徳著「恵比須屋が行状の略」
(網干の恵比須屋甚次郎のこと。明和八年初夏)

これに加えて、竹山も「さん」を顕彰して『貞婦記録』を著した。草稿の日付「辛卯の卯月（明和八年四月）」からすると、龍野より帰坂した直後の執筆である。

『昔の旅』に登場する人物について、この一連の褒賞と顕彰活動とを、時を逐つて整理すると次のようになる。

① 「はつ」褒賞（明和六年）

② 「よし」褒賞、股野「龍野孝婦之小伝」による「よし」顕彰
(ともに明和七年閏六月二三日)

③ 竹山・履軒の「よし」「はつ」「さん」訪問（明和八年三月）

④ 石原「播州佐江村貞婦小伝」・竹山『貞婦記録』による「さん」顕彰（ともに明和八年四月）

⑤ 高尾「八木氏が妻其父に孝行の事」による「はつ」顕彰（明和八年五月）。「さん」褒賞（明和八年五月一九日）。

これによれば、③の竹山・履軒の龍野行きの直後に相次いで、④・⑤と石原・高尾によって「はつ」「さん」顕彰の文章が書かれ、竹山自らも帰坂直後に「さん」顕彰の筆を取つていることが見て取れる。

この一連の顕彰運動の先駆となつた股野充美（字は玉川。一七三〇～一八〇六）は龍野藩の儒臣で、竹山とは共に藤江熊陽に教えを受けた兄弟弟子という親密な交友関係にあつた。著に前掲の『孝婦鳴盛編』の他、龍野藩内の孝行者の行状を記す『天民録』（寛政四年・一七九二）があり、明和・安永期（一七六四～一七八一）には稻垣子華を訪ねるなど、懷徳堂とも関わりが深く、また孝行への関心の強い人物であつた。また股野の『孝婦鳴盛編』の「増補」に協力した高尾ら三名はみな龍野藩士で、股野と極めて親しい関係にあつた。^{（注）}以上のことから、これら一連の顕彰運動は、股

野ら龍野の人々と竹山との連携によって展開したと見る」ことができる。

その後に底本と諸本との関係に言及する。

これまで竹山の孝子貞婦顕彰として、稻垣子華や京都西岡の義兵衛（後述）に関する活動は注目されてきたが、龍野に関する活動は貞婦「さん」への募金呼びかけが紹介される程度であった。しかし、竹山にとって龍野での活動は、子華や義兵衛らの顕彰運動の展開として意義あるものであった。『貞婦記録』の中で竹山は、「[さん]を援助したいが、我が家計も不如意ゆえ」去し比、西岡の孝子をたすけし前蹟に隨ひ、之しき裏をさぐりて、其余を門人ならびに親しき人々に乞はんとす」と述べる。「西岡の孝子をたすけし前蹟」とは、竹山が京都西岡（竹山の妻の実家の所在地）の孝子義兵衛を顕彰し、同時に彼のために義捐金を募った活動を指す。この結果、義兵衛は御所から褒賞を賜り、竹山著『孝子義兵衛記録』加藤景範著『かしまものかたり（革島語）』によつて顕彰された。

また龍野での活動は、子華・義兵衛の顕彰に並ぶ重要な柱とも見なされた。竹山は、「[子華、義兵衛の他]近づる播（播州）の龍野に、又孝婦芳貞婦參有り、俱に本藩の賞を受く。藩は吾が本土に係る。（中略）今にして迺ち一時の美譚を我門に鐘むるを得たるは、是れ予の尤も訢然たる所なり」（『かしまものかたり』竹山跋）と述べ、龍野の「よ」、「ねえ」を子華・義兵衛と並べて一門の美談に位置付けていく。

今回の研究によつて、『昔の旅』が、龍野における懷徳堂の孝子貞婦顕彰のありさまを髪髪させ、龍野の同志との連携を窺わせる資料である」とが明らかになつた。龍野での活動が、龍野の同志と連動した地域的、人的な広がりをもつて展開したらしい点は注目される。

四、底本・諸本

最後に、訳注の底本および校合に用いた諸本について、先ず書誌を記し、

【底本】

大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本（略称「懷徳堂本」） 1冊 白筆稿本

〔寸法〕外形 縦一四・六×横一六・〇。〔書式〕無郭無界の紙を使用。九行一〇字前後。〔内題〕なし。〔外題〕書題簽「昔の旅」と藍筆書。帙題簽「昔の旅全一函一本履軒手稿」。〔印記〕第一葉表「天生寄進」「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書之印」「履軒圖書」。受入印「昭和29.12.22受入 105021」。〔装丁〕四針眼訂法。全二八葉。〔備考〕朱筆の句点、訂正あり。水哉館遺書。小口書「昔旅」。〔蔵書票〕「遺 4 249」。〔付箋番号〕「208」。

【諸本】

- ① 懐徳堂文庫新田文庫蔵「履軒先生遺稿雜集」所収本（略称「新田本」）
一冊 写本（履軒手稿である）
- 〔寸法〕外形 縦一四・六×横一六・六。〔書式〕無郭無界の紙を使用。一〇行一〇字程度。〔内題〕なし。〔外題〕「旅のむかしかたり」と打付け書も。〔刊記〕なし。〔印記〕表紙右下「新田文庫」。第二葉表「79CL00610 開架図書」。第一葉裏「大阪大学附属図書館」。〔装訂〕仮綴。全二一葉。〔備考〕朱筆の句点、訂正あり。底本の一四葉表三行目「なき数の」～一六葉裏「けしきなし」（訳注第一五段途中～第一八段に該当）が欠葉。〔蔵書票〕なし。〔付箋番号〕なし。

② 大阪府立中之島図書館蔵本（略称「中之島本」） 一冊 写本（明治期、書写者未詳）

〔寸法〕外形 縦一七・〇×横一九・三。〔書式〕無郭無界の紙を使用。一〇行一〇字程度。〔内題〕なし。〔外題〕書題簽「昔の旅」。〔刊記〕なし。〔印記〕遊紙裏「大阪府立圖書館藏書之印」。〔装訂〕四針眼訂法。全一四葉。〔備考〕墨筆の訂正あり。〔藏書票〕「223. 6/48」。〔付箋番号〕なし。

③ 懐徳堂文庫碩園文庫藏『小天地閣叢書⁺』所収本（略称「小天地閣本」）

一冊（数種の書と合冊） 写本。

〔寸法〕外形 縦二七・二×横一八・八。〔書式〕無郭無界の紙を使用。一二行一五字程度。〔内題〕なし。〔外題〕書題簽「小天地閣叢書 乾集」「五井蘭洲 新題百首和歌／中井竹山 新題百首詩／中井履軒 昔の旅／附 履軒行状／書院掲示／五舎銘／良齋行状」。冊子中の一葉に「昔の旅」と打付け書き。〔刊記〕なし。〔印記〕第一葉裏「大阪大學収藏圖書印」。〔昭和26.9.10 受入 32905〕。第二葉表「懷徳堂圖書記」「大阪大學圖書」「碩園記念文庫」。〔装訂〕四針眼訂法。全一七葉。〔備考〕仮名はすべて通行仮名で記す。朱筆の句点、訂正、濁点あり。〔藏書票〕「壬/左/8」。〔付箋番号〕なし。

底本と諸本との関係について、諸本②③は、底本と表記・内容に重要な差異が殆ど見られず、底本を元に伝写されたことが知られる。懷徳堂本を翻刻訳注の底本とした所以である。一方、諸本の①新田本は、「旅のむかしかたり」と題される他、漢字仮名の表記において底本および諸本②③との差異が大きい。また内容においても、底本および諸本②③には記される第三段の送別詩の作者「与瞬」「恥叔」「彪外」「子淵」が、新田本では全て記されないという違いがある。①では主な差異について底本と新田本

とを対照し簡単に考察する。〈 〉は該当箇所の段落番号、(A→) Bは元はAとあつた記述がBに訂正されたこととを示す。

a	底本	くちおしきや（九）
b	底本	くちおしきわさ（や）や （なりけんかし→）なるべし（一）
c	底本	（老の翁→）老たる翁（一四） （老たる翁）
d	底本	（あはれがりて→）あはれがり（一四） （あはれがりて→）あはれがり（一四）
e	底本	あはれか（が）り （文かきてこせよ→）文こせよ（一）
f	底本	文こせよ （けふしも→）よきげちや得たりけん （けふしも→）よきげちや得たりけん
g	底本	ひきいりけり（二〇） （ひきいりける→）ひきいりけり
新田本	新田本	（ひきいりける→）ひきいりけり

対照表から察せられるように、底本には推敲の跡が多く（b・c・d・e・fの五例）、かつそのほとんどが新田本に反映されている（f以外の四例）。一方、新田本には推敲ではなく脱文を補う校正の跡が多く見られる。以上のことから、底本は草稿本、新田本はその改稿本ということにならう。

- (一) 吉田銳雄「懷徳堂水哉館遺書遺物目録」(『懷徳』第一七号、昭和一四年)は「昔文章博士が、弟の岡の翁といふ内記と文章生二人とを伴ひて、浪華より播州巡りをしたる詩歌入の仮名文の紀行文である(傍点は本稿筆者)」(五九頁)とする。『懷徳堂文庫図書目録』(大阪大学文学部、一九七六年)も「日記・紀行」に分類する(国書部六三頁上段)。その他、国文学研究者も近世紀行文の資料と見なしている。板坂耀子「近世紀行文紹介 その五」(『福岡教育大学紀要』第四一号、第一分冊、一九九二年)は、『昔の旅』を次のように紹介する。「友人一人、従者一人と共に、明石付近に桜を見に行く紀行文(傍点は本稿筆者)」
- (二) 福島理子「中井履軒『百首贊々』——真淵批判と景樹『百首異見』への影響——」(『懷徳』第五九号、平成二年)が「履軒は折々好んで和文の歌物語などを草しているのであるが、その中に『昔の旅』と言う和漢の詩歌を折り混ぜた紀行体の物語がある(傍点は本稿筆者)。」とするのを参照。
- (三) 竹山著『眞陰詩集』卷四所収「与弟處叔之龍野留別諸友」(辛卯、明和八年)に「春酒ト良会」と見え、また竹山著『貞婦記録』(草稿「辛卯の卯月」付)に「ちかきころ、予か弟と俱に、龍野に下り(後略)」と見える。
- (四) 「与隣」は『大日本史』筆写の協力者として見える原与隣。「彪外」は竹山の弟子の辻本氏。「子淵」は懷徳堂三代目学主三宅春楼の嗣子、名は光同、号は西海。第三段注参照。
- (五) 「はつ」「よし」は、『官刻孝義録』卷三(播磨国にそれぞれ、「孝行者(中略)はつ 六十二歳 明和六年 褒美」「孝行者(中略)

よし 四十六歳 明和七年 褒美」と見える。「さん」は何故か『官刻孝義録』に見えないが、龍野藩領内において藩から表彰された孝行者等の行状を記す股野玉川著『天民録』には記録され、これによると明和八年五月十九日、さん三十六歳の褒賞である。

(六) 股野玉川の日記『幽蘭堂年譜』に、「明和九年壬辰二月廿八孝婦鳴盛編板本出来」と見える(『播州龍野藩儒家日記—幽蘭堂年譜—』清文堂、一九九五年)。

(七) 股野玉川著『幽蘭堂年譜』の明和八年二月十八日条に、玉川の四十二之年賀に友人十四人が玉川を訪れ酒宴となつたことが見えるが、その中に小西尚賢、高尾欽藏(義典)、石原順藏(公章)が見える。小西尚賢(一七四三~一八二四)は竹山らの伯父伯元に医を学んだ人物。その子小西惟冲(号は澹齋、一七六九~一八五五)は竹山の門人で、龍野藩儒となつた。高尾義典(字は欽藏、号は蘭谷)については未詳ながら、玉川と共に美作の稻垣子華を訪問するなどしている(『幽蘭堂年譜』明和五年二月一四日条)。石原公章(字は有文、号は竹里、通称は順藏)は玉川より年少の藩儒である。

(八) 西村天四著『懷徳堂考』下巻「好善の家風」(明治四四年)、加地伸行編『中井竹山・中井履軒』(明徳出版社)、『叢書・日本の思想家二四』、昭和五五年)第二章第五節「孝子顕彰運動」(小堀一正執筆)に見える。後者は稻垣子華・義兵衛については詳細だが、龍野の活動については『貞婦記録』に見えるさんへの募金活動を紹介するにとどめている。なお『龍野と懷徳堂—学問交流と藩政—』(龍野市立歴史文化資料館(図録二四)、平成一二年)は、「(孝の実践を尊重し、孝子の顕彰活動を行つた)懷徳堂の動きは、困窮

化する中で秩序に不安を持ちはじめた龍野の人々にも影響を与え、龍野領内における孝子孝女の顕彰を盛んなものにしていった。」(第二部 2 (2) 「孝子表彰」と述べ、懐徳堂の龍野に与えた影響を簡潔に指摘する。

(九) 原文「近播之龍野、又有孝婦芳貞婦參、俱受本藩之賞、藩係吾本

土、(中略) 今而廻得鐘一時美譚於我門、是予之尤所訢然。」

(十) 書誌情報の項目は、平成一三年度から一五年度に行われた懐徳堂文庫貴重資料調査での調査項目に拠つた。『デジタルコンテンツとしての懐徳堂研究』(平成十三年度～十五年度 科学研究費補助金基盤研究 (A) (2) 研究成果報告書 研究代表者 下條真司) 所収の湯浅邦弘「懐徳堂文庫貴重資料解題」の解題凡例を参照。

(十一) 懐徳堂文庫を構成する文庫の一つ。昭和五四年(第一次)および昭和五八年(第二次)の二度にわたって中井家遺族の新田和子氏から中井木菟麻呂氏旧蔵の遺物書籍を寄贈された。第一次新田文庫収蔵の書籍について、池田光子「第一次新田文庫暫定目録」『懐徳堂センター報』二〇〇四、大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター) がある。

(十二) 中之島図書館に、異なる書ながら同様の装訂の写本が複数有り、その内一本に書写時期を明治と記すことにより、これも明治期の写本と推測される。

(十三) 西村天因(一八六五～一九二四)が編集した文献善本の写本叢書で、乾坤二集一四三冊からなる。